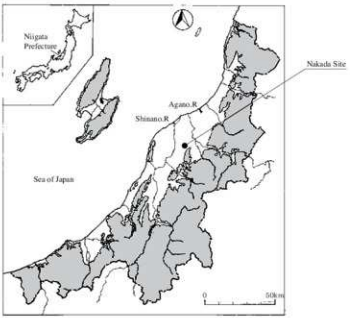
中田（なかだ）遺跡　第2次調査

－ 市道荻川新津線道路改良事業に伴う中田遺跡第２次発掘調査報告書 －



２００９

新潟市教育委員会

例　　言

1　本書は、新潟県新潟市秋葉区結字中田784-4番地ほかに所在する中田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は市道荻川新津線道路改良事業に伴い、新潟市秋葉区役所建設課（以下「建設課」という）から歴史文化課が受託したもので、新潟市教育委員会（以下「市教委」という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター（以下「市埋文センター」という）が補助執行により実施した。

3　出土遺物及び発掘調査の各種資料は、一括して市埋文センターが保管・管理している。

4　本書の編集及び執筆は笹澤（諫山）えりか（市埋文センター　主査）が行った。

5　調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々及び機関よりご指導・ご協力を頂いた。ここに記して厚く御礼申し上げます。

青山博樹　小黒智久　加藤由美子　笹澤正史　笹澤　浩　品田高志　滝沢規朗　田嶋明人　田中耕作　津田憲司
冨田孝彦　布尾和史　久田正弘　細井佳浩　水澤幸一　三ツ井朋子　吉田博行
会津坂下町教育委員会　阿賀野市教育委員会　石川県埋蔵文化財センター　大阪府泉北考古資料館　柏崎市教育委員会
胎内市教育委員会　長岡市教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　新潟県教育庁文化行政課
見附市教育委員会　秋葉区役所建設課　（所属・敬称略）

凡　　例

1　本書は、本文と巻末図版（図版・写真図版）からなる。

2　本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約７度である。掲載図面のうち既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者と作成年を示した。

3　敬称は原則として省略した。

4　参考・引用文献は発行者と発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

5　試掘調査時の層序は斜字体で表記し、本調査と区別した。

6　土層および土器の色調は「新版標準土色帖」［農林水産省農林水産技術会議事務局 1967］を用い、その記号を記した。

7　図面の座標標記は世界測地系の第Ⅷ系公共座標による。

8　掲載遺物は通し番号とし、本文及び観察表・図版・写真図版の番号は同一である。

目　　次

第Ⅰ章　序　　章 …… 1

第１節　発掘調査にいたる経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2

第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 2

第２節　周辺の遺跡 …… 4

第Ⅲ章　調査の概要 …… 7

第１節　試 掘 調 査 …… 7

第２節　発 掘 調 査 …… 7

第３節　整 理 作 業 …… 10

第Ⅳ章　遺　　跡 …… 11

第１節　基本層序と微地形 …… 11

第２節　遺構と遺物の分布状況 …… 11

第３節　遺 構 各 説 …… 13

第Ⅴ章　遺　　物 …… 17

第１節　概　　要 …… 17

第２節　観察項目と製作痕跡について …… 17

第３節　土器の分類 …… 19

第４節　遺 物 各 説 …… 21

第Ⅵ章　ま　と　め …… 23

第１節　遺　　構 …… 23

第２節　遺　　物 …… 23

引用・参考文献 …… 28

報告書抄録・奥付 …… 巻末

挿図目次

第 1 図　新潟市の位置（S=1/500,000）……1
第 2 図　中田遺跡周辺の遺跡分布と地形分類（S=1/100,000）……2
第 3 図　中田遺跡周辺の旧地形（S=1/50,000）……3
第 4 図　中田遺跡周辺の遺跡（S=1/50,000）……5
第 5 図　試掘坑の配置（S=1/5,000）と土層柱状図（S=1/40）……8
第 6 図　本調査範囲とグリッド設定図（S=1/2,500）……9
第 7 図　土器の器種別分布（S=1/200）……12
第 8 図　土器の部位名称（S=1/6）……17
第 9 図　土器実測図の表現方法（S=1/5）……18
第 10 図　土器分類図（S=1/8）……20
第 11 図　スス・コゲ付着分類（S=1/8）……24
第 12 図　新潟県内出土古墳時代中期後半から後期前半の土器（S=1/10）（1）……26
第 13 図　新潟県内出土古墳時代中期後半から後期前半の土器（S=1/10）（2）……27

表目次

第 1 表　中田遺跡出土炭化材樹種同定結果……13
第 2 表　新潟県内出土古墳時代中期後半から後期前半の主な遺構の器種組成……26
別 表 1　遺構一覧……29・30
別 表 2　遺物一覧……31・32

図版目次

図版 1　調査区全体図（S=1/200）と層序（S=1/80）
図版 2　遺構個別図 1　SI12・13　SK26・27（S=1/60）
図版 3　遺構個別図 2　SK1 ～ 5・9 ～ 11・15・24・29・36・39 ～ 42　P8　SX25（S=1/40）
図版 4　遺構個別図 3　SK45・47・50・51・54　SD7・31　SX6・18 ～ 20・43・55　土器集中地点 1・2（S=1/40）
図版 5　遺物 1　遺構出土遺物 1　SI12・13　SK1（S=1/3）
図版 6　遺物 2　遺構出土遺物 2　SK2・4・5・15・24・39・45　P35・56　SX18・25・55　土器集中地点 1（S=1/3）
図版 7　遺物 3　遺構出土遺物 3　土器集中地点 2　遺構外出土遺物 1（S=1/3）
図版 8　遺物 4　遺構外出土遺物 2（S=1/3）
図版 9　遺物 5　遺構外出土遺物 3（S=1/3）
図版 10　遺物 6　遺構外出土遺物 4（S=1/3）

写真図版目次

写真図版 1　遺跡周辺の航空写真　調査区完掘
写真図版 2　表土掘削　基本層序　包含層掘削　土器集中地点 2
写真図版 3　13H5 ～ 12 1 23 グリッド調査区横断土層堆積　遺構確認面精査　SI12
写真図版 4　SI13　SK26・27　遺物水洗
写真図版 5　SK1 ～ 4
写真図版 6　SK5・15　P8・SK9　SK24・SX25
写真図版 7　SX25　SK39・40・42・45　SX19
写真図版 8　SX55　P35・56　古墳時代の遺物 1
写真図版 9　古墳時代の遺物 2
写真図版 10　古墳時代の遺物 3
写真図版 11　古墳時代の遺物 4
写真図版 12　古墳時代の遺物 5
写真図版 13　古墳時代の遺物 6　杯・高杯・甕の底部成形
写真図版 14　スス・コゲの付着状況

第Ⅰ章　序　　章

第１節　発掘調査にいたる経緯

建設課より平成 19（2007）年 12 月 5 日付秋建第 982 号で、秋葉区福島から田島地内における市道荻川新津線道路改良事業（第 2 期分）に伴う「埋蔵文化財の事前調査（試掘）について（依頼）」が、新潟市教育委員会教育長あてに提出された。

これを受けて市教委は、平成 20（2008）年 3 月 6 日付新歴第 5228 号の 2 で、「埋蔵文化財発掘調査について（着手報告）」を新潟県教育委員会教育長（以下「県教委」という）あてに提出し、試掘調査を実施することとした。開発予定面積は約 9,000m^2 で、現状は水田及び農道であった。湧水が著しく遺構の確認はできなかったものの、遺物包含層が厚さ 15cm から 20cm と安定して堆積していたことから遺跡と認定し、調査終了後、遺跡番号 739「中田（なかだ）遺跡」として平成 20 年 3 月 12 日付新歴第 5228 号の 7 で「新遺跡の発見について」を県教委あてに提出して登録し、周知化を図った。

開発対象区域のうち、本発掘調査対象面積は、地形と遺物出土状況を勘案して 12・14T を中心とする 500m^2 程度とした。建設課と本発掘の調査時期や経費等について協議した結果、平成 20 年 10 月から 11 月に本発掘調査を行い、その成果を平成 21 年 3 月までに報告書を刊行することで合意した。ここまでの業務は、歴史文化課埋蔵文化財係が行い、これ以降の本発掘調査に伴う業務については、埋蔵文化財センターに引き継いだ。

平成 20 年 8 月 22 日付新秋建第 642 号で、建設課より「埋蔵文化財包蔵地（遺跡）本発掘調査依頼について（通知）」が提出されたのを受けて、平成 20 年 9 月 28 日付新歴第 5143 号の 10 で、「埋蔵文化財発掘調査について（着手報告）」を県教委に提出した。その後、著しい湧水が予測されたため、排水対策を開渠から暗渠工法へ変更したことや、周辺工事との兼ね合いから重機類の搬出時に鉄板が多数必要となるなど、増額が見込まれることとなった。このため、再度建設課と協議を行い、工法変更と増額について了解を得た後、10 月 6 日より現地調査に着手した。

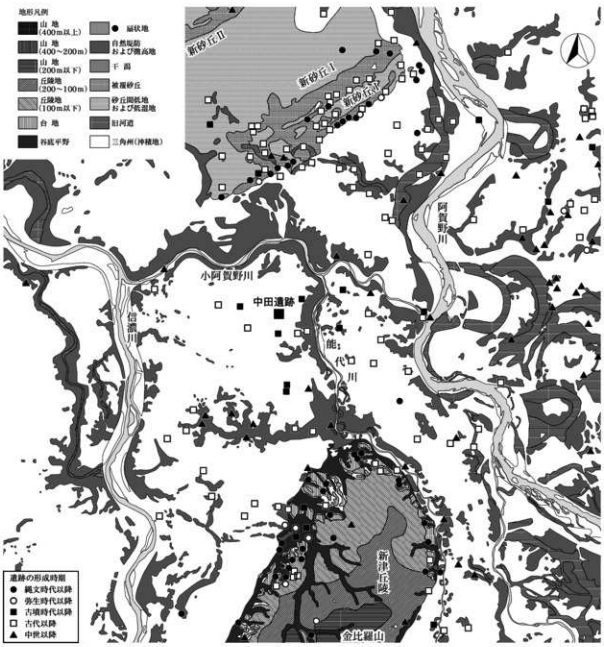
第１図　新潟市の位置（S＝1/500,000）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

A　越後平野の概要

越後平野は、新潟県の中央やや北寄りにあり、北西側を日本海に面する約 2030m² の広大な平野である。平野は主に洪積台地と沖積低地によって構成され、そのうち低地が９割を占める点が越後平野の大きな特徴である。この沖積低地は、阿賀野川や信濃川などによって運ばれた土砂が堆積して形成されたもので、自然堤防や海岸砂



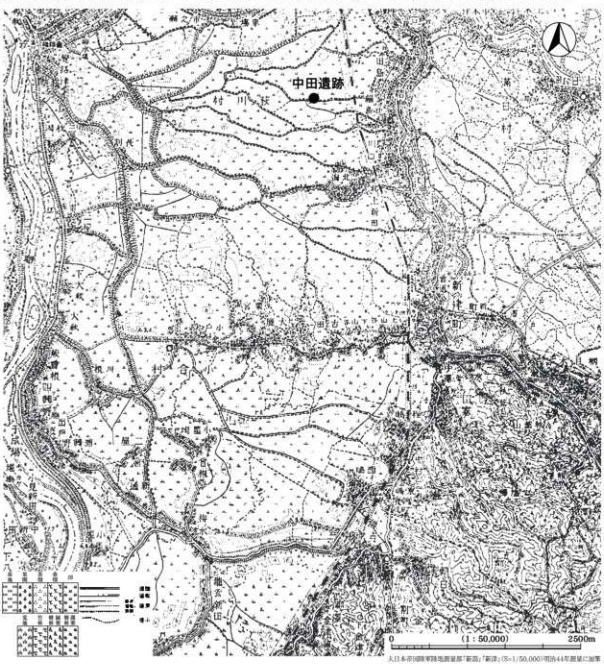
第２図　中田遺跡周辺の遺跡分布と地形分類（S＝1/100,000）

丘などの微高地と氾濫原とに細分される。

砂丘は、海岸線にほぼ平行して内陸側から順に堆積し、新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと番号が付されている。新砂丘Ⅰが最も古く、形成時期は、縄文時代前期まで遡る〔新潟市史 1994〕。この砂丘列により、河川は日本海に注ぎ込む前に行く手を遮られ、行き場を失った水は氾濫原を形成する。氾濫原は新砂丘Ⅰ以南に広がり、そこに流れ込んだ河川が蛇行した結果、流路沿いに自然堤防が残される。また、阿賀野川などの大河川の場合、上・中流域の盆地で大半の砂礫が堆積し、下流まで運ばれてこない。そのため越後平野は扇状地が発達せず、蛇行帯が広がるといわれている〔新潟古砂丘グループ 1974〕。

B　新潟市域の遺跡の立地と中田遺跡

第２図に遺跡周辺の地形と遺跡の形成時期を示した。市域では、冠水しにくい砂丘や丘陵、自然堤防上など比較的安定した土地に遺跡が多い。周辺の遺跡の立地を時代順に見ていくと次のような傾向がうかがえる。



大日本帝国陸軍陸地測量部「新潟」「新津」(S=1/50,000)明治44年測量に加筆

第３図　中田遺跡周辺の旧地形（S＝1/50,000）

①弥生時代以前：旧石器時代の遺跡は丘陵上にのみ確認されている。縄文時代以降は砂丘・台地・丘陵部などの高台に多く、自然堤防上の遺跡は少ない傾向にある。
②古墳時代：前代に引き続き砂丘や丘陵裾部に遺跡が形成される一方、自然堤防上の遺跡の発見例が増加する。
③古代以降：台地・丘陵部には製鉄・須恵器窯跡などの生産遺跡が築かれ、砂丘や自然堤防上に集落遺跡が多く形成される。

今回調査を実施した中田遺跡は、新潟市秋葉区結から福島地内にあり、西を信濃川、北を小阿賀野川、東を能代川に囲まれた信濃川低地に立地する。現況は水田で、標高は約3mである。このあたりの自然堤防は、現信濃川に対しほぼ直交する形で残っており、阿賀野川の流路変遷に伴って形成されたと考えられている〔新津市史1989〕。遺跡の東側を流れる能代川は、川幅が狭く流下能力が低いため、頻繁に洪水を起こしたことから土砂が厚く堆積した。このため、水成層下に、縮尺1/50000程度の地形図では表現されないような小規模な自然堤防が埋没していることがある。今回報告する中田遺跡もそのような自然堤防上に立地する遺跡のひとつである。

また、北潟や古田のあたりの比較的大きな自然堤防は、標高5mから6mと周辺に比べて高く、西沼遺跡や腰廻遺跡など古代から中世にかけて継続した複合遺跡が立地する。また、能代川右岸も標高5m前後で沖ノ羽遺跡や中谷内遺跡など、やはり遺跡範囲が広く長期にわたって営まれる遺跡が多い。一方、能代川左岸では、旧地形図（第3図）で標高3.5m前後の地点に、東西に伸びる里道が数条記されており、これらは自然堤防の痕跡を示している可能性がある。中田遺跡や上浦A遺跡など古墳時代から古代の遺跡は、地形図と調査成果を照合するとこれらの自然堤防上に立地すると推測される。なお、このような低い自然堤防上に立地する遺跡は、比較的小規模で短期間営まれる遺跡が多い。上記のことから、標高3m程度の微高地は古墳時代後期以降平安時代にかけて埋没が進行し、その後居住には適さない湿地帯となるが、標高5mを超える自然堤防上は、洪水被害を受けにくいため長期間営まれた遺跡が多いものと思われる。

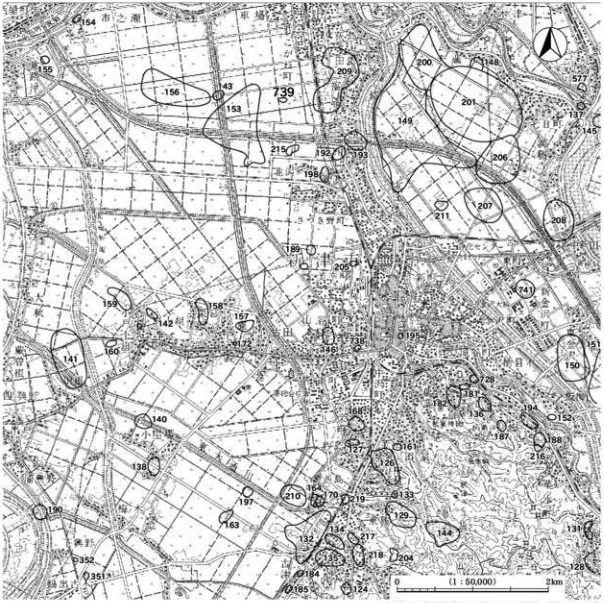
第2節　周辺の遺跡

中田遺跡周辺の主要な古墳時代の遺跡を時期毎に概観する。遺跡名後ろの括弧内の数字は、新潟市の遺跡番号である。また、参考文献が記されていないものは遺跡台帳を参考にした（第4図）。
遺跡の立地傾向を見ると、能代川と小阿賀野川の合流点付近の微高地上と、新津丘陵西側丘陵上に古墳時代の遺跡がまとまって分布している。

前期　土坑などの検出例はあるものの、建物跡は検出されておらず、集落としての様相が不明な遺跡が多い。
新津丘陵上に墳長約60mの造り出し付き円墳である古津八幡山古墳がある〔甘粕・川村ほか1992〕。丘陵西側の裾部に古墳時代の土師器小片が出土している遺跡が数か所あり、古墳との関係の解明が待たれる。能代川左岸の結七島遺跡（209）は、標高約2.2mの自然堤防上にあり、前期から中期の遺構はなく、土器のみ出土した。上浦B遺跡（215）は、前期から中期のものと思われる土師器の高杯や甕が出土した。能代川右岸に位置する沖ノ羽遺跡（149）では、土坑から前期後半とされる高杯や甕が出土している〔星野ほか1996〕。

中期　舟戸遺跡（132）や中谷内遺跡（200）、沖ノ羽遺跡がある。
舟戸遺跡は、新津丘陵西側旧大通川の自然堤防上に立地する。竪穴住居等が検出され、遺物量も多く、内容が豊富な遺跡である〔川上1995〕。中谷内遺跡では、中期から後期の土坑が発見され、小型壺などが出土している〔北村ほか2004〕。沖ノ羽遺跡からは、溝などから中期から後期のものと思われる屈折脚をもつ高杯や甕などが出土している。

後期　結遺跡（143）・中田遺跡・上浦B遺跡・中谷内遺跡・沖ノ羽遺跡などがある。このうち、結遺跡・中田遺跡・上浦B遺跡は、第2図では表現されないような小規模な自然堤防上に立地する。一方、中谷内遺跡や沖ノ羽遺跡など前期または中期から継続する遺跡は、比較的規模の大きい自然堤防上に立地する。



平成９年国土地理院　発行　1:50,000　地形図　「新津」に加筆

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
124	高矢A	縄	153	上浦A	古代・中世	195	本町石仏	中世
126	原	縄	154	川原畑	中世	197	古通	平
127	山崎	縄	155	下等別当	古代～中世	198	川口乙	平
128	平	縄	156	長沼	平・鎌	200	中谷内	古墳・平・中世
129	平林	縄	157	横畑	室・安	201	西野	平・中世
131	妙平	縄	158	浄光	室	204	山境	縄・弥・江
132	舟戸	弥・古墳・古代	159	西沼	平	205	理堀	中世
133	大坪	古代	160	長左エ門沼	平	206	無頭	平
134	塩平	弥・古墳・古代・中世	161	城見山	縄・古代・中世	207	大下	平
135	高矢C	古墳	163	中郷	平	208	中新田久保	平
136	七本松窯跡群	平	164	蛾大門	平	209	結七島	古墳・古代・中世
137	寺島	平・鎌	168	程島製鉄	戦	210	西島中谷内	古代
138	曽根	平・鎌	170	西島製鉄	中世	211	山王浦	平
140	下梅ノ木	平・鎌～南	172	諏訪神社石仏	中世	215	上浦B	古墳・古代
141	川根	古代～中世	181	小手平	縄	216	愛宕澤	縄・平・中世
142	小戸下組	平・鎌～室	182	秋葉	縄・弥・奈・平	217	山脇	古墳・平
143	結	古墳・奈	184	二百刈	縄・古代	218	森田	弥・古墳・平・中世
144	荒島城跡	室	185	下谷地	縄	219	重島大道下	古墳・古代・鎌・室
145	長崎（城跡）	室	187	滝谷窯跡	平	351	杉石塚	不明
146	新津城跡	平・南～戦	188	草水町2丁目窯跡	壮石器・縄・平	352	榎石塚	不明
148	新久兎の塚	室～江	189	山谷北	古墳	577	浜屋敷跡	古墳・平・鎌～室・近世
149	井ノ浜	古墳・古代・中世	190	浦興野	古代	728	秋葉2丁目窯跡	平
150	西江浦	平	192	川口甲	平	738	宵兎	古代
151	細池寺道上	平・中世	193	江内	平・中世・江	**739**	**中田**	**古墳**
152	民地の塚	室	194	草水町1丁目窯跡	平	741	大野中	縄・平

縄：縄文時代、弥：弥生時代、古墳：古墳時代、古代：飛鳥・奈良・平安時代、中世：鎌倉・南北朝・室町・安土桃山時代、近世：江戸時代

第４図　中田遺跡周辺の遺跡（S＝1/50,000）

結遺跡では、土地改良工事中に黒色土器が出土し、市史では８世紀代とされているが〔新津市史 1989〕、図面や写真から判断して、後期の短脚高杯の可能性があろう。結七島遺跡では、後期の土師器甕が７個体以上一括出土した遺構（SX256）が検出されている。遺物量も多く、一定期間定住していたと想定されるが〔田中ほか 2004〕、建物跡などの住居に関わる遺構は確認されていない。山谷北遺跡（189）では、６世紀後半の土師器が出土したとされるが、詳細は不明である。沖ノ羽遺跡では、立会調査時に黒色土器の杯が数点まとまって出土している〔立木ほか 2008〕。

また、このほかに破片資料のため時期など詳細は分からない遺跡も幾つかあるが、同時期に丘陵裾部と沖積微高地上に遺跡が形成されていた状況が認められる。飛鳥時代は、上浦Ｂ遺跡や結七島遺跡で当該期のものと思われる須恵器杯蓋小片が若干出土しているのみであり、集落の存在は確認できていない。中田遺跡周辺の集落は、古墳時代後期のある段階で一旦断絶するようである。

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

第1節　試　掘　調　査

平成 20 年 3 月 6・7 日に、1.5m × 3m の試掘坑を 26 か所設定して試掘調査（第 1 次調査）を実施した。最終的な調査面積は、合計 117m^2 である（第 5 図）。

調査の結果、12・14 トレンチの地表面下－ 0.9 から－ 1.0m の地点で、暗灰色粘土またはシルト層（Ⅹ層）から土師器片（12 トレンチ 17 点、14 トレンチ 1 点）が出土した。時期は、12T 出土遺物に黒色土器杯の口縁部が認められたことから、古墳時代後期の所産と判断した。

第2節　発　掘　調　査

A　調 査 の 方 法

1）事　前　準　備

現況は水田で、水田面の標高は 3.0m 前後である。調査地周辺の農道の幅が狭いことから、重機等搬入時の安全性確保のため、大型土嚢を設置して鉄板を敷き、隅切りを設置するなどの事前準備を行った。

2）グリッド設定

調査対象範囲を中心に遺跡推定範囲をカバーするようにグリッドを設定した（第 6 図）。12H Ⅰグリッド北西角の座標は、X=20259.00、Y=53470.00 である。大グリッドは、1 辺 10m とし、北西角を起点として南北方向をアラビア数字、東西方向アルファベット（大文字）で表記した。小グリッドは大グリッドを 25 分割し、大グリッド同様北西角を起点としてアラビア数字とアルファベット組み合わせて「12J15」のように表記した。現場では大グリッドに杭、小グリッドに釘を打って地点を示すこととした。

3）表土掘削と排水対策

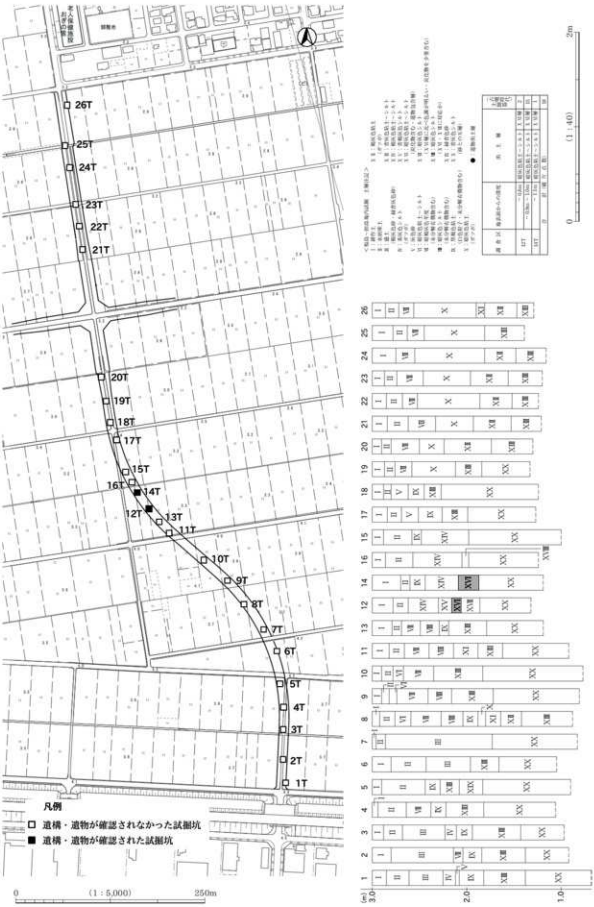
0.4m^3 級バックホウを用いて掘削を開始した。湧水が著しいことから開渠のみでは不十分と判断し、調査区の両脇に幅 0.5m、深さ 0.7m の暗渠を設置することとした（写真図版 2）。暗渠の設置により、排水効率は向上したが、難点として、暗渠に豆砂利を使用したところ周囲に付着し、遺構清掃時に手間がかったことが挙げられる。当初の予定では地表面下－ 0.9 から－ 1.0m 地点で遺物包含層が検出されると想定していたが、実際には掘削深度－ 0.6m で多量の土器が出土したため、このレベルで地形を勘案しながら作業を進めることとし、並行して基本層序の確認を行った。

4）遺物包含層掘削

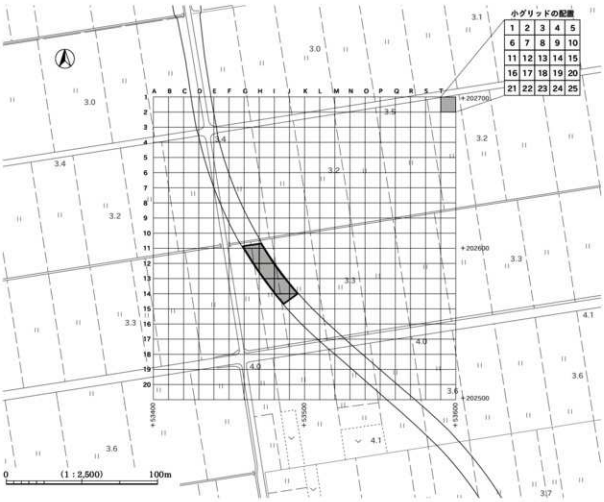
当初重機ですべて掘削する予定であったが、遺物量が多いことから方法を変更し、遺物の出土状況を見極めながら重機と人力を併用して掘り下げた（写真図版 2）。暗渠掘削時の遺物は、約 1m ごとに区切り仮番号を付して取り上げ、基準杭設置後は全点測量を行った。しかし、遺物取り上げ時の写真撮影等による記録が十分でなかったため、出土状況から有意義な成果を引き出せなかったことが反省点として残った。

5）遺　構　調　査

遺物包含層掘削中、土器や炭化物集中地点が検出されたためサブトレンチを入れて遺構の発見に努めた。しかし、遺構が検出できなかったため、遺物包含層を完全に掘り下げて遺構精査を行った（写真図版 3）。遺構確認面



第５図　試掘坑の配置（S＝1/5,000）と土層柱状図（S＝1/40）



第６図　本調査範囲とグリッド設定図（S = 1/2,500）

が軟弱なため、地表面の浅い窪みに包含層が溜まり一見遺構のように見えるものも存在したため、最終的に遺構確認面（Ⅵ層）上面から 5cm ほど下げて遺構の平面形を確認せざるを得なくなった。その結果、遺構が本来の掘り込みよりも浅くなったり、遺物包含層出土遺物として取り上げた遺物の帰属について再検討が必要になるなどの問題や調査方法等の課題も生じた。

遺構は、合計 53 基検出され（別表 1）、検出順に種類に関係なく通し番号を付して記録した。土層は半載を基本として、観察・写真撮影後、業者委託により写真測量を行い図化した。遺構出土遺物は遺構番号を付して取り上げた。掘削終了後,写真撮影と平面測量をした。主要な遺構については６×７判でリバーサル､35mm で白黒･リバーサル、デジタルカメラの４種類で写真撮影を行った。ピットや性格不明遺構など適宜撮影を省略したものもある。

6）調 査 の 経 過

10 月 6 日　事前準備。プレハブ設置。機材等搬入。

10 月 9 日　表土掘削開始。

10 月 14 日　暗渠設置開始。掘削中土師器甕破片が多量に出土。並行して土層確認、遺物の取り上げを行った。

10 月 22 日　暗渠設置終了。土が乾くまでにさらに１週間を要した。

10 月下旬　包含層掘削中、遺物や炭化物の集中地点が検出された。

11 月上旬　暗渠排水が機能し始め、遺構検出が可能となり、土坑や竪穴状遺構が検出された。

11 月下旬　荒天の日が続き、しばしば調査中断。

12 月 10 日　ローリングタワーを設置して調査区全体写真を撮影した。

12月15日　現場作業完了。調査日数57日、作業員人数のべ353人日を要した。

B　発掘調査の体制

発掘調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	新潟市教育委員会　教育長　佐藤満夫
所管課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課　課長　倉地一則　課長補佐　山田一雄　埋蔵文化財係長　渡邊朋和
事務局	新潟市埋蔵文化財センター　所長　山田光行
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター　主査　笹澤（諫山）えりか
調査員	新潟市埋蔵文化財センター　臨時職員　池田ひろ子
調査補助員	新潟市埋蔵文化財センター　臨時職員　内藤正義　真島世津子
発掘支援	株式会社　ノガミ
測量支援	株式会社　オリス

調査運営は、担当が現場の総括、調査員が写真撮影および遺構検出・土層断面確認、調査補助員が写真撮影や遺物取り上げ補助、遺物や記録類の整理、支援業者が現場の安全管理や重機等の操作、作業員の雇用や管理、測量業者が遺物の取り上げや遺構平断面・地形測量をするなど、作業を分担して遂行した。また、炭化材の樹種同定を株式会社火山灰考古学研究所に委託した。

第3節　整　理　作　業

A　整　理　方　法

現地調査時は、雨天時に遺物洗浄・図面整理等を行った（写真図版4）。現地調査終了後は、室内で遺構図・写真の整理と並行して遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、トレース、図版組み等の作業を行った。脆弱な土器についてはバインダー液やパラロイドB72（濃度5～10％アセトン溶液）などを含浸もしくは塗布するなどして強化した。パラロイド溶液は乾燥が早く扱いが容易であった。遺物の注記は「08中田」とし、出土位置・層位・取上番号等を記入した。遺構出土遺物は遺構毎に1から番号を付した。当初人力で注記する予定であったが、遺物量が多いため注記マシンを2週間ほど使用した。これにより9割方注記を終え、大幅に時間を短縮することができた。土器の接合にはセメダインとアロンアルファ（ゼリー状）を用い、充填にはQテックスに朱墨を適量混ぜて使用した。接合作業は、遺構出土遺物を優先して進めた。実測遺物は、遺構出土遺物を最優先とし、包含層出土遺物は器形の特徴が判るものを抽出した。実測には、約4週間の期間を要した。

B　整理作業の体制

整理作業の体制は下記のとおりである。

調査主体	新潟市教育委員会　教育長　佐藤満夫
所管課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課　課長　倉地一則　課長補佐　山田一雄　埋蔵文化財係長　渡邊朋和
事務局	新潟市埋蔵文化財センター　所長　山田光行
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター　主査　笹澤（諫山）えりか
調査補助員	新潟市埋蔵文化財センター　臨時職員　内藤正義　真島世津子
遺物写真撮影	ビッグヘッド
版下デジタル編集	株式会社セビアス

遺物の写真撮影はビッグヘッドに委託し、ニコンD100を使用して撮影した。遺構図・遺構図版や遺物図版については、デジタル編集を株式会社セビアスに委託し作成した。

第Ⅳ章　遺　　跡

第１節　基本層序と微地形

現況の地表面は、標高 3.0m 前後である。旧水田の下にシルト質の無遺物層が厚く堆積していたため、遺跡は、後世の削平をほとんど受けていなかった。遺物包含層（Ⅴ層）は、標高 2.2m 前後で確認され、厚さ 15cm から 20cm と良好に残っていた。遺構確認面の標高は、1.5m から 1.8m である。Ⅱ章でも述べたが、中田遺跡は埋没した自然堤防上に立地しており、その自然堤防は東西方向に帯状に長く伸びる形状で、南北約 40m、東西 100m を超えると思われる。調査区中ほどで標高約 1.8m の最高位を示し、頂部は狭い平坦面を持つ。南北へ緩やかに傾斜し、調査区北端では標高 1.50m 前後となる。一方調査区南端は、北側より傾斜がきつく、標高 1.40m 前後となる。

基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層　にぶい黄褐色（10YR4/3）　粘質土　しまり・粘性あり。現代の水田耕作土。

Ⅱ層　暗灰黄色（2.5Y4/2）　粘質土　しまり・粘性あり。水田床土。

Ⅲ層　灰黄褐色（10YR4/2）　粘質土　しまり・粘性あり。旧水田か。

Ⅳ層　灰色（7.5Y6/1）　シルト質粘土　しまり・粘性あり。洪水性堆積層。

Ⅴ層　暗灰黄色（2.5Y5/2）　シルト質粘土　しまり・粘性あり。遺物包含層。試掘調査時のⅩⅥ層にあたる。

Ⅵ層　灰色（10Y5/1）　シルト質粘土　しまり・粘性あり。遺構確認面。試掘調査時のⅩⅩ層にあたる。

遺物包含層（Ⅴ層）は、12H から 13I グリッドにかけて部分的に 1mm から 2mm 大の炭化物を含み、やや暗い色調となるが、北側に行くに従い明るい色調を呈する。遺構確認面の傾斜がきつくなる 14J グリッドから調査区南端にかけて次第に堆積は薄くなる。この地点の遺物包含層（Ⅴ層）上には、水成堆積と思われる暗褐色から黒褐色粘質土層が堆積し、遺物包含層形成後滞水していた様子がうかがえる。

なお、土層の堆積状況を壁面で観察すると、Ⅴ層とⅥ層の境界が波打つように凸凹しているのが見て取れる。軟質土壌であることが原因と思われる。

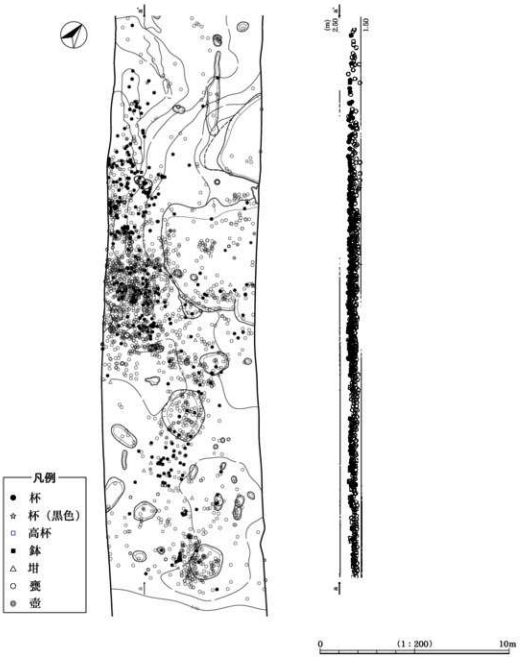
第２節　遺構と遺物の分布状況

A　遺構分布状況

遺構は、遺構確認面の標高が調査区最高位となる標高 1.70m から 1.80m の地点に、竪穴状遺構などの大形遺構が集中し、標高 1.60m 前後の緩斜面上の地点では、土坑やピット、性格不明遺構が分布していた。北側に土坑、南側にピットや性格不明遺構が目立つ。さらに調査区両端の標高 1.40m から 1.50m と低くなる地点では、遺構は見られなかった。

B 土器の平面分布および出土状況

土器が集中して出土した 12H・13H・13 Ｉグリッドを中心に、土器の分布を示した（第７図）。土器の平面分布をみると、遺構の分布状況と整合が見られ、微高地上の平坦部分となる 12H・13H・13 Ｉグリッドに集中し、緩斜面となる 14 Ｉ・14J グリッドでは少なくなる。また、垂直分布を見ると、遺物包含層（Ⅴ層）上部に集中することが読み取れる。



第７図　土器の器種別分布（S＝1/200）

次に、器種別に分布状況を見てみると、甕の出土が最も多く、かつ広範囲に破片が分布する。特に 13H4・5 グリッドと 14I5 グリッドに多い。高杯は、調査区中央から南半にかけて分布し、13H5 グリッドに集中する。杯･鉢･坩などの小型品は、12H から 13I グリッドにかけて分布し、12H18･23、13I6、13I23 グリッドの３か所に多い。14I5 グリッドの出土遺物は、杯や高杯など供膳具が目立つ。

また、 個々の土器の出土状況では、遺物包含層からの出土でも、甕がその場に置き去られたような状況を示すものや、同一個体の破片がまとまって出土する場合があり、土器が遺棄または廃棄された場所からあまり移動していない可能性がある。

第3節　遺　構　各　説

遺物包含層（Ⅴ層）中には、古墳時代以外の遺物は含まれていなかったため、遺構はすべて古墳時代以前のものと判断した。遺構の記述は、種類別に番号順にした。遺構の種類は次のとおりである。

竪穴状遺構：1 辺 2m 以上で平面形が隅丸方形状の掘り込みをもつものをとし、「SI」と表記した。

土　　坑：概ね直径 0.5m 以上で平面形が円形あるいはそれに類するものをとし、「SK」と表記した。

溝　：長軸が短軸に対し 2 倍以上の長さのものをとし、「SD」と表記した。

ピ　ッ　ト：概ね直径 0.5m 未満で平面形が円形あるいはそれに類するものとし、「P」と表記した。主要なもののみ記した。

性格不明遺構：上記以外の遺構で平面形が不定形で掘り込みが浅く、性格が不明のもの。「SX」と表記した。主要なもののみ記した。

土器集中地点：掘り込みを伴わず、2m 四方程度の範囲に土器が集中して出土した地点を、土器集中地点とした。

本文ではおもに遺構の形状、規模、土層堆積状況や遺物の出土状況等を記述し、別表に計測値・土層注記・出土遺物等を記載した。また、遺物が良好な状態で出土した遺構は、微細図等で出土状況や分布状況を示した。

A　竪穴状遺構（SI）

SI12・13 のいずれも調査区外に広がるため、遺構の規模や形態は推定である。

SI12（図版 2、写真図版 3）　11H24、12H4・5、9・10 グリッドにあり、遺構東側は調査区外に延びる。検出部分で長軸 4.80m、短軸 3.48m 以上、深さ 18cm で、平面形は隅丸方形状を呈する。埋土は 5 層に分かれ、1 層は、炭化物が多く混じり、遺構中央付近にレンズ状に堆積する。2 層は、遺構全体を覆うように 10cm 程度堆積していた。3 層は、焼土層で、遺構中央南寄りの底面に掘り込まれた長軸 0.5m、短軸 0.4m 以上、深さ約 10cm のピット状遺構内に堆積していた。このピット状遺構は、底に被熱によると推測される硬化面をもつことから、地床炉と判断している。4・5 層は、粘性が強い土質で、遺構底面に 5cm から 10cm ほどの厚みをもって水平堆積していたことから、貼り床の可能性がある。なお、遺構が廃絶した後の地震により 3 ～ 5 層の一部が噴砂で撹乱されていた。

遺物は、砥石 1 点（図版 5-1）とテンバコ 1 箱分の土師器甕や坩の破片が出土した。土器はほとんどが小片で、2 層から散発的に出土しているに過ぎない。砥石は床面直上で出土した。

SI13（図版 2、写真図版 4）　12H15・19・20・24・25、12I11・16・17・21・22、13I1 グリッドにあり、SK26・SK27 と重複する。切り合い関係は、SK26 より新しく、SK27 より古い。主軸は N - 45°- W である。規模は、長軸 6.01m、短軸 5.2m 以上、深さ 31cm で、平面形は、隅丸方形である。北側の壁面は、立ち上がりが不明瞭であった。西辺近くに P48・49 が検出されたが、浅いため柱穴とは認定できなかった。埋土は 5 層に分けられる。1 層は、遺物包含層Ⅴ層が遺構中央付近にレンズ状に堆積したもので、遺構の埋没が自然堆積によるものであることを示している。また、2 層より建築部材の一部と推測される炭化材が出土しているが、炭層や焼土の堆積は見られず、壁面や床面に火を受けた痕跡も認められなかったため、焼失したものであるかは断定できない。

遺物は、2 層と 4 層で比較的まとまって出土した。遺構中央付近の 2 層から、土師器甕 2 個体分（図版 5-5・6）が横位でつぶれたような状態で出土した。3 層まで堆積した後、2 個体同時に廃棄したものと思われる。また、遺構中央から北寄りと東端の 2 か所で炭化材群が出土し、北寄りを炭化材群 1、東側を炭化材群 2 として記録した。

第 1 表　中田遺跡出土炭化材樹種同定結果

試料			結果（学名／和名）	
SI13	2 層	炭化材①	*Juglans*	クルミ属
SI13	2 層	炭化材②	*Juglans*	クルミ属
SI13	2 層	炭化材③	broad-leaved tree	広葉樹
SI13	2 層	炭化材④	*Salix*	ヤナギ属
SI13	2 層	炭化材⑤	*Salix*	ヤナギ属
SI13	2 層	炭化材⑥	*Juglans*	クルミ属
SI13	2 層	炭化材⑦	*Juglans*	クルミ属
SI13	2 層	炭化物⑧	*Juglans*	クルミ属
p16（13H10）№ 3 炭化物			*Morus australis* Poiret	ヤマグワ

炭化材群１からは、最長約 1.2m、径 7cm 程度の炭化材が４本ほど出土し、２層から前述の甕とほぼ同じ高さで出土した。材の太さが直径 6cm から 7cm 程度であることから、屋根材もしくは垂木の一部の可能性がある。樹種同定の結果、クルミ属の使用が確認された。炭化材群２では、長さ約 30cm の炭化材と、近接して南側に黒色土器杯１点（図版 5-2）が出土した。樹種同定の結果、炭化材群２には、クルミ属・ヤナギ属の２種が使用されていた。黒色土器杯は逆位で出土している。底部外面にススが付着し赤化した部分がある。小甕（図版 5-4）は、４層より外面を上にして出土した。

Ｂ　土　　坑（SK）

SK1（図版 3、写真図版 5）　11G10 グリッドにあり、規模は、長径 0.97m、短径 0.93m、深さ 8cm である。平面形はほぼ円形で、底は平坦面をもち、壁面はゆるく立ち上がる。埋土は２層に分層され、遺物は１層から土師器甕破片（図版 5-10・11）がまとまって出土した。

SK2（図版 3、写真図版 5）　11G15・20、11H11・16 グリッドにあり、規模は、長径 1.1m、短径 0.75m、深さ 14cm である。平面形は楕円形で、断面はゆるい半円状である。埋土は２層に分層され、１層から土師器甕破片（図版 6-12・13）がまとまって出土した。

SK3（図版 3、写真図版 5）　11H21 グリッドにあり、規模は、長径 0.74m、短径 0.42m、深さ 13cm である。平面形は楕円形で、北側がわずかに高い段状になる。埋土は２層に分層され、２層下部から土師器甕小片が出土した。

SK4（図版 3、写真図版 5）　11H18 グリッドにあり、規模は、長径 0.64m、短径 0.50m、深さ 13cm である。平面形は楕円形で、壁はゆるく立ち上がる。埋土は２層に分層される。土坑中央よりやや北側で、土師器甕（図版 6-14）１個体が底部を欠くものの正位で出土した。あるいは人為的に置かれたものと想定される。

SK5（図版 3、写真図版 6）　11H21 グリッドにあり、規模は、長径 0.52m、短径 0.40m、深さ 10cm である。平面形は楕円形で、底面がやや窪み、壁面はゆるく立ち上がる。埋土は単層で、土師器甕（図版 6-15）が横倒しの状態で出土した。

SK9（図版 3、写真図版 6）　12H7・8 グリッドにあり、規模は、長径 0.66m、短径 0.36m、深さ 6cm である。平面形はやや細長い楕円形で、壁はゆるく立ち上がる。埋土は単層で、遺物の出土はない。

SK10（図版 3）　12H18 グリッドにあり、SK11 に切られる。規模は、長径 0.73m、短径 0.50m、深さ 4cm である。平面形は残存部分から楕円形と推定され、壁はゆるく立ち上がる。埋土は単層で、遺物の出土はない。

SK11（図版 3）　12H18 グリッドにあり、規模は、長径 0.63m、短径 0.48m、深さ 5cm である。平面形は楕円形で、壁際はゆるく立ち上がる。埋土は単層で、土師器甕破片が少量出土した。

SK15（図版 3、写真図版 6）　12H23 グリッドにあり、規模は、長径 0.58m、短径 0.4m、深さ 9cm である。平面形は歪んだ楕円形で、底面は南側が少し深い。埋土は２層に分層され、１層から土師器杯（図版 6-16）等が出土した。

SK24（図版 3、写真図版 6）　13H9・10 グリッドにあり、長径 0.86m、短径 0.62m、深さ 19cm で、埋土は２層である。SX25 と重複し、SK24 が新しい。平面は楕円形である。１から２層にかけて土師器高杯（図版 6-17）と甕破片が少量出土した。

SK26（図版 2、写真図版 4）　13I1 グリッドにある。SI13 に切られるため全体の形はわからないが、残存状況から平面形は歪んだ円形と思われる。底は平坦で、壁はゆるく立ち上がる。埋土は単層で、土師器甕破片が少量出土した。

SK27（図版 2、写真図版 4）　12I22・23 グリッドにある。排水路に切られ全体の形はわからないが、残存状況から平面形は歪んだ円形と思われる。底は平坦で、壁はゆるく立ち上がる。埋土は２層に分層され、遺物の出土はない。

SK29（図版3）　13I16・17・21・22　グリッドにあり、規模は、長径1.58m、短径0.74m、深さ12cmである。平面形は細長い楕円形で、断面はゆるい半楕円形である。埋土は2層に分層され、2層から土師器甕破片が少量出土した。

SK36(図版3)　13I20グリッドにあり、規模は、長径0.62m、短径0.43m、深さ9cmである。平面形は楕円形で、底は平坦で、断面は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分層され、1・2層から土師器甕破片が少量出土した。

SK39（図版3、写真図版7）　13I20グリッドにあり、規模は、長径0.64m、短径0.47m、深さ18cmである。平面形は歪んだ楕円形で、断面はおおむねすり鉢状を呈する。埋土は3層に分層され、2層から土師器杯が（図版6-18）出土した。

SK40（図版3、写真図版7）　13I20・25グリッドにあり、規模は、長径0.38m、短径0.25m以上、深さ6cmである。平面形は、歪んだ楕円形である。埋土は単層で、遺物の出土はなかった。

SK41(図版3)　13I20グリッドにあり、SK36に切られる。規模は、長径0.69m、短径0.4m、深さ12cmである。平面形は楕円形で、底は平坦である。埋土は、2層に分層され、2層から土師器甕破片が少量出土した。

SK42（図版3、写真図版7）　14I2・3・7・8グリッドにあり、北側を排水路に切られる。規模は、残存部分で、長径5.2m、短径0.99m、深さ18cmである。平面形は土坑中ほどで少し曲がる長楕円形である。埋土は、2層に分層される。また、南端にピット状の硬化面があり、色調と土質がSI12の地床炉とよく似ており、炉の可能性がある。1層から土師器甕破片が少量出土した。

SK45（図版4、写真図版7）　14I5・14J1グリッドにあり、規模は、長径1.91m、短径1.72m、深さ20cmである。平面形は不整な円形で、底面は若干凹凸がある。埋土は2層に分層され、2層に直径0.5から1cmの炭粒がまばらに混じる。1・2層から、土師器杯（図版6-19）・高杯（図版6-20）・甕の破片が散らばって出土した。

SK47（図版4）　13I19グリッドにあり、規模は、長径0.78m、短径0.42m、深さ9cmで、埋土は1層である。平面形は歪んだ長円形で、断面は半円状である。遺物の出土はない。

SK50（図版4）　13H5・10グリッドにあり、規模は、長径0.84m、短径0.52m、深さ14cmである。埋土は単層であったが、地山と埋土がよく似ていたため、遺物を含む土質を目安に遺構を掘り下げた。平面形は、歪んだ楕円形である。1層から、土師器甕の破片少量が出土した。

SK51（図版4）　13I6グリッドにあり、規模は、長径0.86m、短径0.37m、深さ10cmである。平面形は、細長い楕円形である。埋土は単層で、1層から土師器甕の破片少量が出土した。

SK54（図版4）　13H4・9グリッドにあり、規模は長径0.81m、短径0.5m、深さ16cm、平面形は楕円形である。埋土は2層で、1層から土師器甕や杯の破片が少量出土した。

C　溝（SD）

SD7（図版4）　11H23、12H3・8・9グリッドにある溝で、規模は、長軸4.48m、短軸0.25から0.64m、深さ10cmである。溝幅は、北端より1.8mの辺りで広くなる。断面形は、底からゆるく立ち上がる。埋土は2層に分層され、土師器甕の破片が少量出土した。

SD31（図版4）　13I22グリッドにあり、規模は、長軸1.02m、短軸0.25m、深さ5cmである。遺物の出土はない。

D　ピ　ッ　ト（P）

P14　12H15グリッドにあり、規模は、直径0.26m、深さ5cmである。平面形は、円形である。SI12の地床炉と同じく底面が褐色で硬化していることから、炉の可能性がある。遺物の出土はない。

P35（写真図版8）　13I14・19グリッドにあり、規模は、長径0.39m、短径0.24m、深さ5cmである。平面形は、楕円形である。埋土は単層で、黒色土器杯（図版6-21）破片が出土した。

P56（写真図版8） 14I4グリッドにあり、規模は、長径0.37m、短径0.32m、深さ0.13mである。平面形は、いびつな円形である。埋土は単層で、土師器杯(図版6-22)が正位で出土した。人為的に置かれたものと想定される。

E 性格不明遺構（SX）

SX18（図版4） 13I12・13・17・18グリッドにあり、規模は、長径2.72m、短径2.26m、深さ12cmである。底面は平坦で、壁はゆるく立ち上がる。埋土は2層に分層され、2層が確認面の土質よりわずかに粘性が強いことを目安に遺構を掘り下げた。埋土と地山の区別が難しく、底面の検出が困難であった。土師器高杯（図版6-23）のほか、甕等の破片が少量出土した。

SX19（図版4, 写真図版7） 13I11･12グリッドにあり、規模は、長径0.77m、短径0.44m、深さ8cmである。埋土は、2層に分層される。底面がSI12の地床炉と同じく一部硬化し、埋土に炭が含まれることから、火を焚いた可能性がある。周囲を注意深く精査したが、これにからむような掘り込みは発見されなかった。遺物の出土はない。

SX20（図版4） 13I2･3･7･8グリッドにあり、長径1.54m、短径1.24m、深さ5cmで、埋土は単層である。平面形は、いびつな方形である。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、散在して出土した。

SX25（図版3、写真図版6・7） 13H9・10・14・15・20グリッドにあり、一部調査区外に延びる。規模は、長径4.5m、短径1.52m以上、深さ22cmである。検出部分から、平面形は隅丸方形状と推定され、竪穴建物の一部の可能性がある。埋土は2層に分層され、2層から土師器鉢（図版6-24）や甕、高杯の破片が少量出土した。

SX55（図版4, 写真図版8） 14I3･4グリッドにあり、規模は、長径1.27m、短径0.97m、深さ8cmである。埋土は単層で、全体に炭を多量含む。遺物は、土師器高杯（図版6-25）や杯の破片が少量出土した。

F 土器集中地点

土器集中地点1（図版4, 写真図版4） 12I22・13I2グリッドV層上部で、南北1.5m、東西2.0mほどの範囲に甕2個体分（図版6-26・27）が横倒しの状態で出土した。土圧により破損しており、1辺5cmほどの破片となっていた。

土器集中地点2（図版4, 写真図版2） 13H4・5・9・10グリッドV層上部で、南北0.6m、東西1.5mほどの範囲に甕2個体（図版7-32・33）・坩（図版7-31）・鉢（図版7-28）・高杯（図版7-29・30）などが、ほぼ同じ標高で土圧により押しつぶされた状態で出土した。33の甕は、底部が正位の状態で発見され、その上に体部破片が重なり合って出土したことから、その場に置き去りにされたものであろう。高杯はいずれも細かく割れていた。

第Ⅴ章　遺　　物

第１節　概　　要

古墳時代の土器・石製品・炭化材がテンバコ（長さ 60cm・幅 40cm・深さ 10cm）換算で 42 箱分出土した。土器の種類は、土師器・黒色土器と須恵器がある。遺存状況が良好であったため、調整痕が良く観察できた。石製品は砥石１点、軽石数点、ほぼ球形の礫１点などがあり、剥片などは出土していない。炭化材は非常に脆弱で現地で出土位置の記録を取ったのち、自然科学分析用の切片を取り上げるにとどまった。

第２節　観察項目と製作痕跡について

Ａ　観　察　項　目

ここでは、土器について以下の項目に基づいて観察し、本文及び別表２に記載した。また、土器の部位名称については、第８図に器種別に部位名称を提示した。

法量・遺存率　法量は、原則として口径・器高・底径（高杯は裾部径）を記した。遺存率は、〔宇野1992〕を参考に計測し、分母を 36 として表記した。また、同一個体と思われる破片は、接合しなくても遺存率の合計値を記載した。

容量　〔田中 2006〕に基づき、頸部から底部にかけて容量を計算した。

胎土　器種毎に素地の粗密を比較し、相対的に３段階に分けて精良なものを◎、粗いものを△、○はその中間とした。また、混和材は下記の基準で分類し、大きさと量を記した。

石　英：半透明で割れ面が残り、角が残る。（表中「石」と省略）

長　石：白色で風化し粉っぽい。（表中「長」と省略）

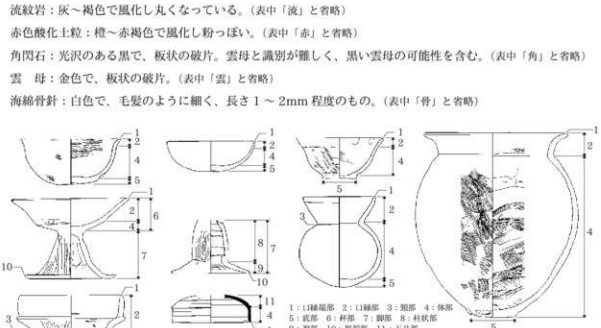
流紋岩：灰～褐色で風化し丸くなっている。（表中「流」と省略）

赤色酸化土粒：橙～赤褐色で風化し粉っぽい。（表中「赤」と省略）

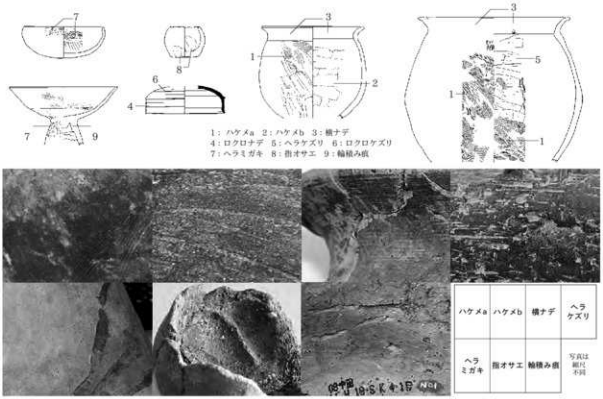
角閃石：光沢のある黒で、板状の破片。雲母と識別が難しく、黒い雲母の可能性を含む。（表中「角」と省略）

雲　母：金色で、板状の破片。（表中「雲」と省略）

海綿骨針：白色で、毛髪のように細く、長さ１～２mm 程度のもの。（表中「骨」と省略）



第８図　土器の部位名称（S＝1/6）



第９図　土器実測図の表現方法（S＝1/5）

色調　なるべく火熱等の二次的な作用を受けていない部分を選んで「新版標準土色帖」から色調を合わせて記した。内外面で色調が異なる場合は両方記した。

調整　内外面の調整方法を部位別に記し、先行する調整から順に「ハケメ→ヘラミガキ」のように表した。

付着物　部位と付着物を記した。

Ｂ　製　作　痕　跡

用語の説明は、調整痕を中心に記載したが、実測図には、成形時の痕跡も可能な限り表現し、使用工具の違いや切り合いの新旧関係を表すよう努めた。また、文中「調整」は省略した。

土器の製作方法については、〔佐原 1986〕に従って土器の形を作る行為を「成形」、表面の整形を「調整」と呼び分けて記述した。中田遺跡で出土した土器の成形方法は、基本的に粘土紐を輪積みにして形作る方法がとられている。成形・調整方法の表記は、〔寺沢ほか 1986〕・〔坂井ほか 1989〕等を参考に、下記のとおりとした（第９図）。

①オサエ：指などで粘土を押さて圧着させるもの。

「指オサエ」　指の痕が残る。接合部分や工具が入らない部分に残ることが多い。

②ナデ：器面を平滑に調整する。

「ハケメ」　板状工具を用いてなでつけたと思われる調整痕跡のうち、木口面の木目が平行して条痕が残るものを「ハケメ a」、条痕が不明で工具の原体幅が残るものを「ハケメ b」とした。木目の擦り減り具合や土器の乾燥の度合いなどによって同一工具を使用しているものが異なるように見える場合も含まれる。

「横ナデ」　指で直接もしくは皮などを用いて口頸部を調整したもの。

「ロクロナデ」　指で直接もしくは皮などを用いて、ロクロ回転を利用して器面を整えたもの。

③ケズリ：器面の粘土を削り取ることによって器面の凹凸や厚さの調整などを行うもの。

「ヘラケズリ」　板状工具等を用いて器面を削るもの。胎土中の砂粒が、削った方向に動いた痕跡が残る。

「ロクロケズリ」　板状工具等を用い、ロクロ回転を利用して器面を削ったもの。

④ミガキ：器面の荒れを整えて平滑にするもしくは、光沢仕上げを行うもの。

「ヘラミガキ」　ヘラまたは石等を用い、2～4mm 幅程度の痕跡が残る。

第3節　土 器 の 分 類

土器の分類は、種別ごとに、器種による分類を大別とし、器種の中での形態差や調整の違いによる分類を細別とした。なお、掲載したもの全てについて器種分類は示したが、破片が小さく細別できなかったものもある。

A　土　師　器

土師器は、今回の調査区内で最も出土量が多い。器種も多種に及ぶが、周辺の遺跡で出土している同時代の土師器と混和材（主に石英･長石･雲母）が共通していることから、遺跡周辺で製作したものと思われ、搬入品はない。

杯　丸底で、口径と器高の比率がほぼ1対2～3前後のものを杯とした。体部は内湾し、内外面にヘラミガキが施される。口径の大きさから12cm 前後、14cm 前後、16cm 前後の3種類が想定される。口縁部形態によって細分した。

a 類　口縁部が短く外反するもの。

b 類　半球形の体部からそのまま口縁部に至るもの。口縁部が内湾気味のものも含まれる。

鉢　平底で、口径と器高の比率がほぼ1対2のものを鉢とした。内外面にハケメa・横ナデが施される。杯に比べ調整が雑である。底部は輪台状平底である。

高杯　杯に脚部がつくものを高杯とした。胎土は、精選された粘土が使われているものが多い。杯部外面はハケメaの後ヘラミガキをしているが、ハケメの痕跡が残る雑な仕上げが目立つ。また、杯部と脚部の接合部に〔渡邊ほか2008〕で「出べソ状」と表現されている粘土塊が観察された（写真図版13）。中田遺跡では、接合部の粘土塊の先端をナデ付けている。口径17～20cm 前後のものが多い。完形品が少なかったため、杯部形態を4分類、脚部形態を3分類した。

杯部a類　口縁部と坏底部の稜は不明瞭で、口縁部が外反する。

杯部b類　口縁部と坏底部の稜は不明瞭で、口縁部がほぼ直線状である。

杯部c類　口縁部が直線状に伸び、口縁端部がわずかに外反する。口縁部中ほどに段がある「有段高杯」である。県内では余川中道遺跡などで類例がある〔飯坂ほか2001ほか〕。

杯部d類　杯身が深く、口縁部が短くつまみだされ、外反する。長野県篠ノ井遺跡群や愛知県志賀公園遺跡などで類例がある〔風間2007ほか〕。

脚部a類　裾部に向かって「ハ」の字に開き、裾部が外反する。内面に輪積み痕が残る。

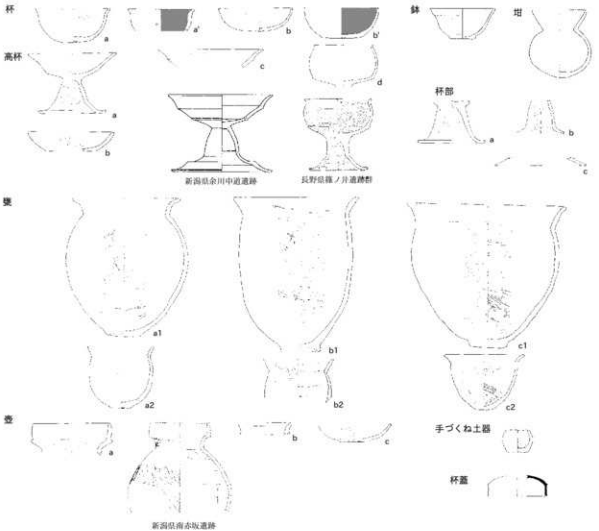
脚部b類　裾部で屈折する。脚部a類に比べ柱状部が細い。内面の輪積み痕が残るものと、ナデ消すものがある。

脚部c類　裾部に段がある。高杯の杯c類と対応するものと思われる。

坩　小形の丸底壺で、頸部が器高の1／2から2／3あたりに位置する。口縁部が直線状に伸びて外傾する。頸部は鋭角に屈曲する。体部は扁球形で、体部中ほどに最大径が位置する。

甕　口縁部が外傾もしくは外反し、頸部ですぼまり、体部球胴形もしくは長胴形のものを甕とした。底部は、平底と丸底があり、大半が輪台状平底である。口縁端部は大半が丸く仕上げられるが、面取りするものも少量ある。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面にハケメa･ハケメb、内面にハケメa･ハケメb･ヘラケズリされる。図6－27や図7－33のように底部と体部の接合部を境に工具が異なるものも少数みられる。また、指オサエ痕が体部内面や底内側に残る。胎土は混和材がやや大粒で粗いものが多い。口頸部・体部等の形態差と大きさにより分類した。

a1 類　口径が概ね20cm 以上で、口径と体部径がほぼ等しいか体部径が大きい。また、体部が球胴形である。体部最大径は器高中ほどに位置する。容量3.5前後と8前後の2種類がみられる。



第10図　土器分類図 (S = 1/8)

a2 類　口径が概ね 20cm 以下で、口径と体部径がほぼ等しいか体部径が大きい。また、体部が球胴形である。体部最大径は器高中ほどに位置する。容量 1 未満である。

b1 類　口径が概ね 20cm 以上で、口径と体部径がほぼ等しいか体部径が小さい。また器高指数が大きく、長胴形である。容量 6 ～ 9 前後のものが多い。

b2 類　口径が概ね 20cm 未満で、体上半部のみのため全体の器形は不明であるが、残存部分から口径と体部径がほぼ等しいか体部径が小さいものと思われる。

c1 類　口径が概ね 20cm 以上で、口径が体部径より大きい。

c2 類　口径が概ね 20cm 未満で、口径が体部径より大きい。

壺　甕に比べてより頸部がすぼまるものを壺とした。体部外面はヘラミガキされている。口縁部～底部まで接合した資料はない。

a 類　受口状口縁で、口縁端部は丸く仕上げられる。口縁部のみ残存。

b 類　短頸直口壺。口縁端部は面取りされ、断面三角形状である。口縁部のみ残存。

c 類　広口壺。底部のみ残存。

手捏ね土器　口径 5cm 程度の器で、底部は輪台状平底である。

B　黒　色　土　器

確認された器種は杯のみである。分類は前述した土師器杯に準じる。

C　須　恵　器

県内では古墳時代の須恵器窯跡は発見されていないため、搬入品と思われる。

杯蓋　天井部端に稜があり、口縁端部は内側に面を持つ。全体にロクロナデされ、天井部外面がロクロケズリされている。

第4節　遺　物　各　説

掲載した遺物は、実際の器種組成比よりも杯や高杯の割合が多くなったが、これらは時期差による形態の変化がよくわかる器種であることとからあえてそのままとした。また、本文中「土師器」は省略する。

A　遺構出土遺物

SI12（図版 5-1、写真図版 11）　1 は砥石で、縦 15.0cm、横 6.8cm、厚さ 4.8cm、重さ 770g である。石材は凝灰岩である。6 面すべてに使用痕があり、特に両側面が大きく擦り減っている。端部に自然面がわずかに残る。

SI13（図版 5-2 ～ 9、写真図版 9・11・12）　2 は黒色土器杯で、b 類とした。火を受けて底部外面が一部焼きはじけ、赤化している。3 は鉢で、体部が直線的に延び、ハケメ a が残る。4 は甕で、c1 類とした。整形には内外面とも同じ工具を用い、内面は若干強めに工具を当てたように思われる。外面口縁部から体上半部と底部内面にススが付着する。5・6 はほぼ同サイズの甕で、a1 類とした。頸部は厚手で接合時の痕跡が残るやや雑な作りである。底部は輪台状である。体部最大径周辺と口縁部にススが付着し、内面底部に炭化物が付着する。5 の外面と頸部内面のハケメ a は同じ工具を用いている。7・8 は調整・胎土が似ており、同一個体と思われる。9 は壺で、a 類とした。器壁が厚く、大形品と推定される。

SK1（図版 5-10・11、写真図版 9）　10・11 は甕である。11 は b1 類とした。ススコゲ等の付着がなく煮炊きに使用されなかったものと推定される。調整・胎土が似ているが、頸部径が一致しないため別個体とした。

SK2（図版 6-12・13、写真図版 12）　12・13 は甕で、頸部は丁寧に接着されているが、体部の仕上げはやや粗く輪積み痕が残る。体部外面は右下がりのハケメ a、内面頸部付近は横方向のハケメ a、頸部から 5cm ほど下はハケメ b である。体部外面にススが付着する。底部は輪台状である。胎土と調整がよく似ており、同一個体の可能性がある。

SK4（図版 6-14、写真図版 9）　14 は甕で a1 類とした。底部欠損する。体部外面と底部内面立ち上がりに同じ工具を用いたハケメ a である。外面全体にスス、体下半部内面にコゲが付着する。

SK5（図版 6-15、写真図版 9）　15 は甕で b2 類とした。体上半部が残る。口縁端部まで内外面ともハケメ a で、口縁部の内外面と体部外面に同一工具を用いている。口縁～体部外面にススが付着する。また体部内面に黒斑がみられる。

SK15（図版 6-16、写真図版 9）　16 は杯で、底部のみ残る。胎土は精良である。

SK24（図版 6-17、写真図版 12）　17 は高杯で a 類とした。他の高杯に比べ、器壁は薄手である。口縁が直線的に延び、口縁端部付近で少し外反する。外面はハケメ a が残る雑な仕上げである。内面に部分的にコゲが付着する。

SK39（図版 6-18、写真図版 9）　18 は杯で b 類とした。内外面ともに一部赤化して表面が剥離し、被熱したと推定される。

SK45（図版 6-19・20、写真図版 12）　19 は杯で a 類とした。器壁は厚手である。内面の一部が赤化しており、被熱したものと思われる。20 は高杯で a 類とした。口縁部が薄く、強く外反する。

P35（図版 6-21、写真図版 12）　21 は黒色土器杯で、a 類とした。底部欠損している。器壁は厚手で、内外面

とも丁寧にヘラミガキされる。

P56（図版 6-22、写真図版 9） 22 は杯で底部のみ残る。外面にススが付着する。全体に風化が著しく調整は不明である。他の杯と比べ胎土に多量の海綿骨針が含まれる。

SX18（図版 6-23、写真図版 12） 23 は高杯で杯部 b 類とした。厚手で、他の高杯と比べ白っぽい焼き上がりである。

SX25（図版 6-24、写真図版 9） 24 は鉢で、口縁部が外反し、端部に面が作り出される。体部ハケメ a が施されているが部分的に指オサエや輪積み痕が残り、雑な作りである。

SX55（図版 6-25、写真図版 12） 25 は高杯で、脚部 b 類とした。外面にヘラミガキが明瞭に残っている。胎土は粗い。

土器集中地点 1（図版 6-26・27、写真図版 9・12） 26・27 は甕で a 類とした。26 は外面のハケメ a に木目の間隔が狭いものが用いられる。

土器集中地点 2（図版 7-28 ～ 33、写真図版 9・10） 28 は鉢である。口縁部外面に横方向の横ナデが残る。29・30 は高杯である。29 は杯部 d 類で器壁が薄く、稜部分の接合が弱い。30 は杯部 a 類とした。31 は坩で、表面の風化が進んでいる。32・33 は甕で 32 は b1 類、33 は c1 類とした。32 の底部の欠損部分が白っぽく変色しており、火を受けて破損したと推定される。33 は口径 33.3cm、器高 30.0cm で容量約 9.82 と今回出土した甕の中では最も大形である。

B 遺構外出土遺物

杯（図版 7-34 ～ 8-45、写真図版 10・12） 43・44 は黒色土器で、そのほかはすべて土師器である。34 ～ 40 を a 類、41 ～ 45 を b 類とした。34 は薄手で風化が進み、表面が剥落している。34 は全体に被熱し赤化している。36 は頸部近くに胴部最大径が位置することから、身が浅いタイプと推定される。薄手で風化が著しく、調整不明である。40 は身が深く、内外面にミガキの痕跡がよく残っている。45 は口径 17.9cm の大形品である。口縁部内面と体部外面にハケメ a が残る。

高杯（図版 8-46 ～ 58、写真図版 10・12） 46 ～ 52 を杯部 a 類、53 を杯部 b 類、54 を杯部 c 類とした。49 は杯部外面にケズリ痕が残り、風化が著しい。口縁部内外面に黒斑がある。50 は脚内部の輪積み痕が消され、比較的丁寧に調整されている。51 は脚部欠損。杯部外面にケズリの痕跡が残り、雑な仕上げである。52 は口縁部が強く外反し、杯部外面に縦方向のミガキが施される。55 を脚部 a 類、56・57 を脚部 b 類、58 を脚部 c 類とした。56 は外面にミガキが丁寧に施される。内外面黒いが、意図的に処理をしたものか不明である。58 は有段高杯の脚部で、段は僅かに残っている程度である。

坩（図版 8-59・60、写真図版 12） 59 は口縁部がわずかに内湾する。体部下半部は縦方向にヘラケズリされる。体部内面は黒化し細かいひびが入っており、体部外面にススが付着する。60 は風化が著しく、ハケメ a がわずかに残る。

壺（図版 8-61・62、写真図版） 61 は b 類で直口壺の口縁部である口縁部は面をもち、上方につまみ出される。62 は c 類で、広口壺の底部である。器壁が薄手のものである。

手捏ね土器（図版 8-63、写真図版） 素地が粗く、内外面に指オサエの痕が残る。底部は輪台状平底である。

須恵器杯蓋（図版 8-64、写真図版 11） 大きさは口径 12.4cm、器高 4.3cm である。混和材は少量で素地の肌理が整っている。器形や稜の突出具合、口縁部の傾き等から、陶邑編年 TK47 段階併行と思われる〔田辺 1981〕。

甕（図版 8-65 ～ 11-79、写真図版 11 ～ 13） 65・66・68 ～ 71 は a1 類、72・73・77 は b1 類、74・75・78・79 は c1 類とした。63 の体部外面と頸部～体部上半部のハケメ a は同一工具使用と推定される。口縁部から体部外面と体部内面の一部にススや炭化物が付着する。68 は頸部近くに、ナデの後ヘラ描きで斜め格子状に線刻されている。体部内外面のハケメ a は同一工具使用と思われる。内面は部分的にナデ消している。口縁部～体部外面にかけてススが付着する。71 は頸部の接着がやや粗い。74・75、76・77、78・79 は調整や胎土が似ていることからそれぞれ同一個体と推定される。

第Ⅵ章　ま　と　め

第１節　遺　　構

当遺跡では518m^{2}と狭少な調査面積ながら、竪穴状遺構２基をはじめ合計53基の遺構が検出された。

遺跡が立地する自然堤防は、第３図から南北幅40m程度で、東西方向に延びると推定される。このような狭い土地を有効活用するため、もっとも標高が高く安定した地点に、住居と推測している竪穴状遺構などの大型遺構を設けて居住地とし、その縁辺の緩斜面に土坑などの住居以外の遺構が構築されたものと考えられる。今回の調査区内では、調査区北側にほぼ同規模の土坑群が構築され、調査区南側にはピットや性格不明遺構が多く検出された。土坑群の中には、SK4で底部欠損した小型の甕やP56で杯が正位で出土するなど、特異な出土状況を示すものも見られた。いずれも人為的に埋め戻された痕跡が認められないことから埋葬施設などではないと思われるが、具体的な用途については明らかにできなかった。今後類例の増加を待って何を目的としたものか検討したい。

また、遺跡の北側と南側で異なる遺構群が検出された状況は、地点によって何らかの場の使い分けをしていた可能性が考えられよう。

このような遺構の分布は、近接する結七島遺跡においても〔諫山 2007〕、微高地の最高地点に遺構を構築する傾向がうかがえることから、低い自然堤防上に立地する遺跡の集落構成のひとつのパターンを示す可能性があろう。

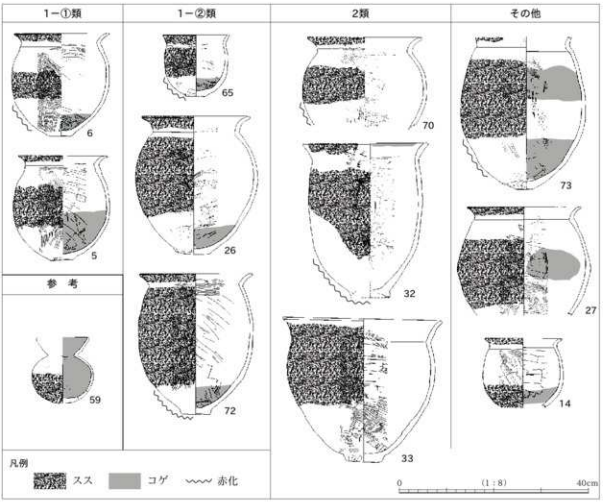
第２節　遺　　物

A　土師器甕に付着するスス・コゲについて

土器の炭化物付着状況から、調理方法などを検討する研究は、佐原真氏の研究〔佐原 1987〕を嚆矢として数多くの論文が発表されている。県内では、坂井秀弥氏が古代の煮炊具を対象に、内面にコゲの痕跡がないことを根拠として、長胴甕が蒸し器として使用されたことを推定し〔坂井 1988〕、のちの使用痕研究の指針を示した。古墳時代のスス･コゲから見た調理方法の研究は、小林正史氏らによる一連の論考〔小林 1991･2008 ほか〕を受けて、滝沢規朗氏により、弥生時代後期から古墳時代前期を対象として使用痕跡の観察による使い分けの対応関係の研究が進められている〔滝沢 2008 ほか〕。しかし、新潟県においては、古墳時代中期～後期の良好な資料が少なかったこともあり、中田遺跡と同時期の資料については、あまり触れられてこなかった。このような研究状況を踏まえ、今回古墳時代後半期の煮炊具の使用方法及び調理方法を検討することも意義があると考え、検討を行った。個体識別した47個体のうち、口縁部から底部もしくは体下半部まで残っている甕11点を抽出し、ススやコゲの付着部位や状況、被熱による色調変化等の肉眼観察を行い、スス・コゲの付着範囲から第11図のとおり分類した。

なお、図32や70などは内面が黒くみえるが〔写真図版14〕、土器の表面に吸着した状態であることから土器焼成時のものと考えられ、使用時に新たに付いたコゲとは異なるものと判断した。

対象とした甕の共通点として、外面底部にススが付着していなかったことがあげられる。この原因として、複数回被熱してススが酸化焼成し剥げ落ちたことが考えられる。土器を火中に据えた場合にこのような痕が残ると指摘されている〔寺沢 1986〕ことと、当遺跡において地床炉が検出されていることから、地面を少し掘りくぼめ



第 11 図　スス・コゲ付着分類（S＝1/8）

	1 - ①類	1 - ②類	2 類	その他
外面	口縁部と体上半部に帯状にススが付着。底部は赤化するものもある。	口縁部と体部全体に帯状にススが付着。底部は赤化するものもある。	口縁部と体部全体にかけて帯状にススが付着。	図版 9-73：内面体下半部から底部にかけてコゲが付着。 図版 6-27：内面体部中ほどにまだらにコゲが付着。 図版 6-14：外面口縁部及び底部付近にススが付着。
内面	体下半部から底部にかけてコゲが付着。	底部から立ち上がりにかけてコゲが付着。	コゲ付着なし。	

て土器が安定するように設置し、底部付近に炭を熾して加熱した可能性を考えたい。

１類と２類の違いは、体部内面のコゲの有無である。小林氏によれば、コゲが残る場合は、「煮」「炊」時に加熱によって内容物である有機物が、内面に付着するような調理方法を行った場合とされる。これに対し、コゲが残らないものは、「蒸す」「茹でる」など直接甕の表面に有機物が付着しにくい調理方法やお湯を沸かすのに用いた場合とされる。出土した甕の多くにコゲが残っていることから、中田遺跡では主に「煮」「炊」され、「蒸す」「茹でる」は補助的に行われたと考えられる。２類としたものは容量６～10 ℓ と今回出土した甕の中では大きい部類のものである。

また、１－①類と１－②類を外面にススが頸部近くに付くか否かによって細分した。１－①類が１－②類に比べより体部が張り出しており、そのためススが頸部付近に付着しにくかった理由の一つとして想定される。また、火力が強ければススがより広範囲に付着したとも考えられよう。

ただし、コゲの有無により調理方法が異なるという見解については、炊飯後の甕に水を入れたところ、おこげがきれいにはがれたとする実験結果の報告〔内田 2003 ほか〕もあり、上記のようにコゲ有＝「煮る」「炊く」、コゲ無＝「蒸す」「茹でる」と対応関係が限定できるかについては、慎重を要しよう。

B　編年的位置付け

新潟県内の古墳時代の中期から後期の編年については、関雅之氏による糸魚川市田伏遺跡での検討〔関 1972〕を嚆矢として、品田高志氏による柏崎平野の遺跡を対象とした編年研究〔品田 1989〕、川村浩司氏による高田平野の関川右岸を対象とした論考〔川村 2000〕、相田泰臣氏による魚沼・頸城地域を対象とした土器様相の研究〔相田 2004〕、菅沼亘氏らによる馬場上遺跡の変遷〔菅沼ほか 2003〕などがあり、資料の充実している上中越において研究が精力的に行われてきた。このような研究によって、古墳時代中期から後期の時期区分の画期は、土師器杯や黒色土器の出現、甕の長胴化、須恵器の導入などを指標として把握されている〔品田 1987ほか〕。ここでは、新潟県内の古墳時代中期から後期の遺跡で土師器杯が出土した遺構を中心に、器種構成と器種の消長を提示して中田遺跡出土遺物と比較し、編年的位置付けを検討する。本来遺構一括資料を基準に用いるべきであるが、遺構出土遺物が少ないことから包含層出土遺物も補助的に用いた。

A 類型　基本的に土師器のみで構成される。器種は杯・高杯・鉢・坩・甕・壺・有孔鉢がある。

杯が導入される段階で、形態は、体部半球形状（杯 a 類）や口縁部外反（杯 b 類）がみられる。高杯の形態は、杯部有稜・口縁部外反（杯部 a 類）、杯部有稜・口縁部直線状（杯部 b 類）、体部内湾形（杯部 c 類）のものがある。杯と高杯の割合は高杯が多い。甕の形態は、口径より体部最大径が大きい球胴形である。底部平底となるものが多い。甑の共伴例はない。舟戸遺跡の出土事例は、逆台形状のシルエットで底部中央に 1 か所穿孔される有孔鉢で、カマド出現以降の甑とは異なる。

A 類型の遺構として、新潟市（旧新津市）舟戸遺跡 SB1、柏崎市戸口 B 遺跡 B － 22 ～ 23 グリッド一括資料などがあげられる〔川上 1995ほか〕。

B 類型　組成に黒色土器と須恵器が加わる。器種は杯・高杯・鉢・坩・甕・壺・有孔鉢がある。

杯や高杯の形態は、前段階の様相を引き継ぐ。杯と高杯の割合は高杯が多い。甕の形態は新たに長胴形が加わる。黒色土器は杯のみである。須恵器は TK216 並行とされる甕の出土例がある。

B 類型の遺構として、南魚沼市（旧六日町市）余川中道遺跡土器集中 1・3 などがあげられる〔飯坂ほか 2005〕。

C 類型　土器の組成は、土師器・黒色土器・須恵器で構成される。器種は杯・高杯・鉢・坩・甕・壺・有孔鉢がある。

杯や高杯の形態は、前段階の様相を引き継ぐ。杯と高杯の割合は高杯が多い。小形の坩が減少もしくは消失する。甕の形態は新たに長胴形（甕 b1 類）が加わる。黒色土器は杯のみである。須恵器は杯蓋など供膳具があり、TK47 並行とされている。

C 類型の遺構として、十日町市馬場上遺跡 49 号住居などがあげられる〔菅沼ほか 2003〕。

D 類型　土器の組成は、土師器・黒色土器・須恵器で構成される。器種は杯・高杯・鉢・坩・甕・壺がある。

杯の形態は口縁部伸長（杯 c 類）と須恵器模倣（杯 d 類）が加わる。高杯の形態は、有稜高杯（杯部 a 類）が減少し、体部内湾（杯部 e・f 類）や短脚（杯部 g 類）が出現する。杯と高杯の割合は、杯が増加傾向に転ずる。黒色土器は新たに高杯も加わる。須恵器は杯蓋など供膳具があり、TK47 並行と思われる。有孔鉢・甑ともに未確認である。

D 類型の遺構として、新潟市笹山前遺跡 SI1、柏崎市（旧西山町）畠田遺跡Ⅲ地区 SI1 などがあげられる〔廣野 1997ほか〕。

E 類型　土師器・黒色土器・須恵器で構成され、主要な器種は杯・高杯・鉢・坩・甕・壺・甑である。

杯は、体部半球形状（杯 a 類）や口縁部外反（杯 b 類）は減少し、口縁部伸長（杯 c 類）が増加する。高杯の形態は、体部内湾（杯部 f 類）が多くを占める。甑は有孔鉢形から底部全体が抜けた甕形に交代する。杯と高杯の割合は、杯が多い。須恵器は杯蓋などに加え甕など貯蔵具もみられる。

E 類型の遺構として、胎内市（旧中条町）船戸桜田遺跡 74 号遺構、野付遺跡 4 号遺構があげられる〔水澤 2001ほか〕。

F 類型　土師器・黒色土器・須恵器で構成され、主要な器種は杯・高杯・鉢・坩・甕・壺・甑である。

杯の形態は口縁部伸長（杯ｃ類）のみである。高杯の形態は、体部内湾（杯部ｇ類）と須恵器模倣（杯部ｈ類）が多くを占める。杯と高杯の割合は、杯が圧倒的に多い。また土師器の杯・高杯は極めて少なくなり、黒色土器に交代する。須恵器は未確認である。

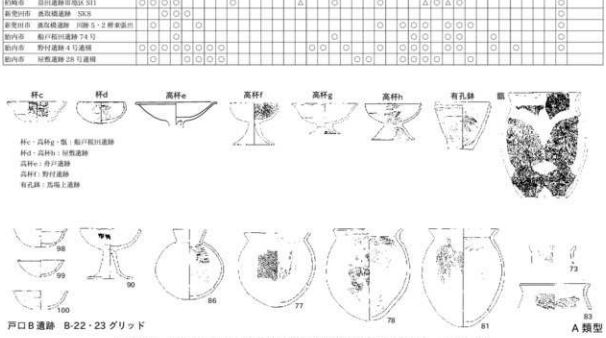
Ｆ類型の遺構として、胎内市（旧中条町）屋敷遺跡 28 号遺構があげられる［水澤 2004］。

上記のとおり器種組成と器種別消長によって類型を設定したが、概ねＡ類型→Ｂ類型→Ｃ・Ｄ類型→Ｅ・Ｆ類型の順に組成が変化するものと思われる。Ｃ・Ｄ類型やＥ・Ｆ類型は組成の差が時期差ではなく、遺構の性格や地域差の可能性を含むため、Ａ類型を１段階、Ｂ類型を２段階、Ｃ・Ｄ類型を３段階、Ｅ・Ｆ類型を４段階として位置付けられる。

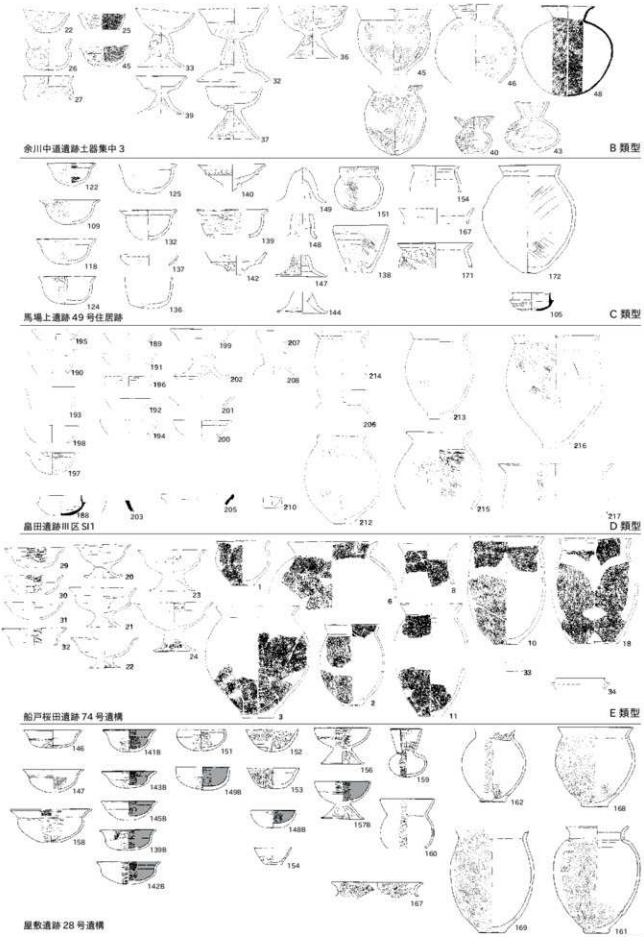
中田遺跡の組成の特徴として、①土器の構成をみると、土師器が大多数で黒色土器と須恵器は少量であること、②器種は土師器の杯・高杯・鉢・坩・甕、壺、黒色土器の杯、須恵器の杯蓋で構成されること、③杯と高杯の割合は高杯が多いこと、④甕の形態は球胴形と長胴形があることなどがあげられる。TK47 並行の須恵器と大形坩の共伴事例は上越市北割遺跡 SK12 にあり［上越市史 2003］、中田遺跡においても TK47 並行と思われる須恵器杯蓋が出土している。このことから、中田遺跡の資料の一部は TK47 と並行する可能性が高い。ただし、器種組成は TK47 並行の須恵器と共伴した遺構資料よりも古い様相を示し、また、口縁部が外反する土師器杯は、十日町市馬場上遺跡 49 号住居出土の杯に比べて短く、型式的にも古相を示す。これらのことから中田遺跡の時期は第２～３段階に位置付けられよう。

第２表　新潟県内出土古墳時代中期後半から後期前半の主な遺構の器種組成

器種	杯								高杯															坩		鉢	甕									壺						有孔鉢	甑	壺			須恵器	その他
遺跡名	a	a'	b	b'	c	c'	d	d'	a	a'	b	c	d	e	e'	f	f'	g	g'	h	h'	a	b	a	b	a1	b1	c1	a2	b2	c2	三足円筒	二重口縁	広口	直口	短口	広口	二重口縁	d	e	小形					
	口縁短く外反		体部平坦形		口縁伸長・外反気味			須恵器模倣	杯部有稜・口縁外反		杯部有稜・口縁直線形	杯部有稜・外反	口縁短く外反	体部内湾・杯部浅身		体部内湾・杯部深身		体部内湾・杯部浅身・短脚	体部内湾・口縁伸長・杯部深身	須恵器模倣		大形	小形			第10図参照																					小形
新潟市　中田遺跡	○	○	○	○					○		○	○	○									○																									○
新潟市（旧新津市）　舟戸遺跡 SB1	○			○					○					○	○							○	○				○				○		○		○			○								
柏崎市　戸口遺跡 B-22～23グリッド一括	○		○	○										○													○			△						○										
南魚沼市（旧八日町）　沢田中遺跡　土器集中３			○	○					○			○	△									○								○	○							○								
南魚沼市（旧八日町）　沢田中遺跡　土器集中 10	○		○	○								○										○					△		△																	
十日町市　馬場上遺跡 49 号住居	△		○	○					△			△	△									○					○	○		△			○													
上越市（旧板倉町）　南原遺跡 SD1	○	○	○	○												○	○				○	○					△				△		△													
新潟市　笹山遺跡 SI1	○		○	○					△					△	△				△			○					△	△	△	○	○	○														
柏崎市　荒山遺跡甲地区 SI1	○	○	○	○					○							△			○			○						△	○	△	○															
新発田市　表原遺跡　SK8			○	○	○																																									○
新発田市　表原遺跡　同跡５・２層東張出		○			○		○															○		○	○		○	○		○	○																○
胎内市　船戸松川遺跡 74 号				○														○									○	○		○																	○
胎内市　野付遺跡 4 号遺構	○	○	○	○	○	○	○	○								○	○										○	○		○					○											○
胎内市　屋敷遺跡 28 号遺構		○			○	○	○	○												○	○						○	○	○	○																



第 12 図　新潟県内出土古墳時代中期後半から後期前半の土器（S = 1/10）(1)



第 13 図　新潟県内出土古墳時代中期後半から後期前半の土器（S = 1/10）(2)

引用・参考文献

ア　相田泰臣　2004　「越後における古墳時代後期を中心とした土器の一様相―頸城・魚沼地域の土師器を中心として―」『新潟考古』第15号　新潟県考古学会

甘粕　健・川村浩司ほか　1992　『古津八幡山古墳Ⅰ　1991年測量調査報告』　新津市教育委員会

飯坂盛泰ほか　2007　『一般国道17号六日町バイパス関係発掘調査報告書　余川中道遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

渕山えりか　2007　『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅴ　第19次調査　一市営下興野中野線道路改良工事に伴う結七島遺跡第3次発掘調査報告書―』　新潟市教育委員会

内田真澄　2003　『土器でお米を炊いたなら…　かみつけの里博物館夏季企画展』　かみつけの里博物館

宇野隆夫　1992　「食器計量の意義と方法」『国立歴史民族博物館研究報告』第40集　国立歴史民族博物館

大平理恵　2001　『南原遺跡　板倉北部宅地造成事業に伴う発掘調査報告書』　板倉町教育委員会

カ　川上貞雄　1995　『舟戸遺跡発掘調査報告書』　新津市教育委員会

川村浩司　1988　「越後の古墳時代中・後期の土器について」『新潟考古学談話会会報』第1号　新潟考古学談話会

川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相―関川右岸下流域を中心に―」『上越市史研究』第5号　上越市

北村　淳ほか　2004　『中谷内遺跡Ⅱ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』　新津市教育委員会

小林正史　1991　「土器の器形と炭化物からみた先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』第1号　北陸古代土器研究会

小林正史・阿部昭典　2008　「縄文深鉢のスス・コゲから見た調理方法：胴下部コゲの形成過程を中心に」『新潟考古』第19号　新潟県考古学会

サ　坂井秀弥　1988　「古代のごはんは蒸した「飯」であった－古代の米調理復元メモ－」『新潟考古学談話会会報』第2号　新潟県考古学会

坂井秀弥ほか　1989　『新新バイパス関係発掘調査報告書　山三賀Ⅱ遺跡』　新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局・新潟県国道工事事務所

佐原　真　1986　「総論　聞いて分かる用語を」『弥生文化の研究』第3巻　雄山閣出版

佐原　真　1987　「煮るか蒸すか」『飲食史林』第7号　飲食史林刊行会

品田高志　1985　『古井遺跡群Ⅰ』　柏崎市教育委員会

品田高志　1987　『帝国石油新長岡ライン埋蔵文化財発掘調査報告書』　柏崎市教育委員会

品田高志　1990　『古井遺跡群Ⅱ』　柏崎市教育委員会

品田高志ほか　1999　「古墳」『新潟県の考古学』　高志書院

品田高志　1989　「越後における古墳時代土器の変遷―柏崎平野の中～後期を中心に―」『柏崎市立博物館館報』No.4　柏崎市立博物館

上越市史編纂委員会　2003　『上越市史』資料編二考古　上越市

菅沼　豆ほか　2003　『馬場上遺跡発掘調査報告書』　十日町市教育委員会

鈴木俊成ほか　1994　『北陸自動車道　上越市春日・本田地区発掘調査報告書Ⅳ　一之口遺跡東地区』　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

関　雅之　1972　『田伏玉作遺跡』　糸魚川市教育委員会

タ　滝沢規朗　2008　「古墳時代前期における甕の使用痕跡についての覚書」『三面川流域の考古学』第6号　奥三面を考える会

田嶋明人　1986　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人　1991　「5北陸」『古墳時代の研究』6　雄山閣出版

田中一廣ほか　2004　『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　新津市教育委員会

田中耕作　2004　「考古学の用語と文章ことば」『新潟考古学談話会会報』第28号　新潟考古学談話会

田中耕作　2006　「簡易な土器容量測定方法の紹介」『新潟考古学談話会会報』第31号　新潟考古学談話会

田辺昭三　1981　『須恵器大成』角川書店

立木宏明ほか　2008　『沖ノ羽遺跡Ⅳ　第15次調査　－県営圃場整備事業（担い手育成型）満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第8次発掘調査報告書－』　新潟市教育委員会

鶴巻康志・吉田好孝ほか　2007　『渡取橋遺跡・神明裏遺跡発掘調査報告書』　新発田市教育委員会

寺沢　薫ほか　1986　『矢部遺跡』　奈良県立橿原考古学研究所

ナ　長岡市教育委員会　2008　『五千石遺跡現地説明会資料』

中島義人　2001　『昌田遺跡発掘調査報告書』　西山町教育委員会

風間栄一ほか　2007　『篠ノ井遺跡群（6）』　長野市教育委員会

奈良文化財研究所（岡村道雄編）　2008　『日本各地・各時代の焼失竪穴建物跡　本文・図版編』

新潟古砂丘グループ　1979　「新潟平野をめぐる地形と特質－5砂丘と平野」『アーバンクボタ17』　株式会社クボタ

新潟市史編さん原始古代中世部会　1994　『新潟市史』資料編1原始古代中世　新潟市

新津市史編さん委員会　1989　『新津市史』資料編第一巻原始・古代・中世　新津市

ハ　早野浩二ほか　2001　『志賀公園遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター

廣野耕造　1997　「笹山前遺跡・神明社裏遺跡・城山遺跡－県営圃場整備事業（先進技術導入モデル事業亀田郷地区）に伴う平成7年度・平成8年度発掘調査報告書－」　新潟市教育委員会

星野信明ほか　1996　『沖ノ羽遺跡Ⅱ　B地区』　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

マ　前山精明ほか　2003　『南赤坂遺跡・縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査-』　巻町教育委員会

水澤幸一　2001　「『船戸桜田遺跡2次』　中条町教育委員会

水澤幸一　2007　「天野遺跡2次・野付遺跡2次』　船内市教育委員会

水澤幸一ほか　2004　「屋敷遺跡2次』　中条町教育委員会

望月精司　2004　「北陸・信越地域の土器」『考古資料大観』第3巻弥生・古墳時代土器Ⅲ　小学館

ヤ　吉田博行ほか　2003　『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ　中平遺跡　男埴遺跡』　会津坂下町教育委員会

ワ　渡邊裕之ほか　2008　『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ横マクリ遺跡』　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

別表１　遺構一覧

図版No.	遺構名	位置 グリッド	規模（m） 長径	短径	深さ	土層注記	遺物
2	SI12	I13E24、I23E4・5・9・10	4.80	3.48	0.10	1：灰オリーブ色（7.5Y5/2）細砂質粘土。しまりあり、粘性あり、褐鉄が混じる。床２1cm の炭が全面広がる。 2：灰オリーブ色（7.5Y5/2）シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。 3：灰オリーブ色（7.5Y5/2）細質粘土。しまりややあり、粘性ややあり。 ①：オリーブ黒色（10Y3/2）細質粘土。しまりややあり、粘性あり。（明瞭） ②：灰色（10YN/1）細質粘土。しまりややあり、粘性あり。（明瞭） ③：オリーブ黒色（10Y5/2）粘土。しまりあり、粘性あり。長径１～0.2cm 大少粒混。弥生壺が落ち込んだとみられる。（明瞭）	土師器壺等破片、礫石 図版 3-1
2	SI13	I20E15・19・20・24・25、I21E4・16・17・21・22、I31	6.01	5.20	0.30	1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。土器が混じる。 2：灰色（5YN/1）細砂質シルト。粘土。しまりややあり、粘性あり。	土師器壺・須恵土器杯 図版 3-2・9
3	SE1	I11G10	0.97	0.93	0.08	1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）細質粘土。しまりあり、粘性あり。2 層より少や硬い。1 土器出土。	土師器 図版 3-10・11
3	SE2	I31G5・20.I31H1・16	1.10	0.75	0.34	1：灰色（10YN/1）粘土質シルト。しまりあり、粘性ややあり。土器出土。 2：灰色（5YN/1）細砂質シルト。しまりややあり。粘性ややあり。	土師器 図版 3-12・13
3	SE3	I11H21	0.74	0.42	0.12	1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。 2：オリーブ黒色（10Y4/2）細砂質粘土。しまりあり、粘性あり。土器出土。 3：灰色（10YN/1）粘土。しまりややあり、粘性あり。	土師器
3	SE4	I11H18	0.64	0.50	0.12	1：灰色（7.5YN/1）粘土質シルト。しまりあり、粘性あり。長径３～0.5cm 大こくや粒混。 2：灰色（10YN/1）細質シルト。しまりややあり、粘性ややあり。	土師器 図版 3-14
3	SE5	I11H23	0.52	0.40	0.10	1：オリーブ黒色（10Y3/2）粘土・シルト混細砂。	土師器 図版 3-15
3	SE6	I22F7・8	0.66	0.36	0.06	1：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土。褐鉄が混混。しまりあり、粘性あり。	なし
3	SE10	I20H8	0.79	0.50	0.04	1：灰オリーブ色（5Y5/2）シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。	なし
3	SE14	I20H6	0.63	0.48	0.08	1：灰オリーブ色（7.5Y5/2）シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。SE10（下層よりやわらかくやんだ色調。長径１～0.2cm 大こくや粒混。	土師器壺破片
3	SE15	I22H23	0.58	0.40	0.08	1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。しまりあり、粘性ややあり。長径２～0.4cm 大少粒混。 2：灰オリーブ色（7.5Y4/2）細砂・シルト質粘土。しまりあり、粘性ややあり。	土師器杯・須恵片 図版 3-16
3	SE24	I20H9・10	0.86	0.62	0.39	1：オリーブ黒色（2.5GY5/1）粘質シルト。長径２～0.4cm 大少粒混。灰色（10Y5/1）粘質土がブロック状に混じる。しまりあり、粘性あり。 2：灰色（10YN/1）粘質シルト。長径1cm 大少粒混。しまりあり、粘性あり。	土師器杯・須恵片 図版 3-17
2	SE26	I31	1.50	0.78	0.31	1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。土器出土。 2：灰色（10YN/1）シルト質粘土。しまりややあり、粘性あり。	土師器壺破片
2	SE27	I22J2・23	2.35	0.86	0.10	1：灰色（5YN/1）シルト質粘土。土器出土。	土師器壺破片
3	SE29	I31G・17・23・22	1.58	0.74	0.12	1：オリーブ黒色（10Y3/2）シルト質粘土。長径０.5～1cm 大少粒混。しまりややあり、粘性あり。 2：灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘土質シルト。しまりややあり、粘性ややあり。	土師器壺破片
3	SE30	I32G9	0.62	0.43	0.09	1：灰オリーブ色（5Y5/2）シルト質粘土。柱ブロック（褐粘色 2.5YR3/1）シルト質粘土）が少粒混じる。しまりあり、粘性あり。土器出土。 2：灰オリーブ色（5Y5/2）細砂・粘土質シルト。しまりあり、粘性あり。	土師器壺破片
3	SE39	I32G9	0.64	0.47	0.38	1：灰オリーブ色（5Y4/2）細砂・シルト質粘土。長径１～0.2cm 大少粒混。しまりあり、粘性ややあり 2：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土。長径１～0.2cm 大少粒。しまりあり、粘性あり。 3：灰オリーブ色（7.5Y5/2）シルト質粘土。長径１～0.2cm 大少粒。粘性あり。	土師器杯・須恵片 図版 3-18
3	SE40	I32G9・25	0.38	0.25	0.06	1：灰オリーブ色（7.5Y5/2）粘土質シルト。長径１～0.2cm 大少粒混。	なし
3	SE41	I32G9	0.69	0.40	0.12	1：灰色（10YN/1）粘土質シルト。長径0.5cm 大少粒混。しまりあり、粘性あり。 2：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。長径0.5cm 大少粒混。しまりあり、粘性あり。	土師器壺破片
3	SE42	I42・3・7・8	0.20	0.90	0.18	1：灰オリーブ色（5Y4/2）粘土質シルト。長径１～0.2cm 大少粒混。 2：褐灰色（10YR5/1）細砂・シルト質粘土。しまりややあり、粘性あり。 3：灰色（2.5Y5/1）シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。長径２～0.3cm 大少粒。 4：褐灰色（10YR5/1）細砂・シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。長径２～0.3cm 大少粒。	土師器壺破片
4	SE45	I42E・I42J	1.91	1.72	0.20	1：灰色（10Y5/1）シルト質粘土。長径２～0.3cm 大少粒混。しまりややあり、粘性あり。 2：灰色（7.5Y5/1）シルト質粘土。長径１～0.6cm 大少粒混。しまりややあり、粘性あり。土器出土。	土師器杯・高杯・壺・須恵片 図版 3-19・20
4	SE47	I31J9	0.78	0.42	0.09	1：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土。長径２～0.3cm 大少粒混。しまりややあり、粘性あり。	なし
4	SE50	I33E・10	0.64	0.52	0.34	1：灰色（10YN/1）粘土。しまりあり、粘性ややあり。	土師器壺破片
4	SE51	I33L	0.66	0.37	0.10	1：灰オリーブ色（7.5Y5/3）シルト質粘土。しまりあり、粘性ややあり。	土師器壺破片
4	SE54	I20H・9	0.81	0.50	0.16	1：灰色（10YN/1）シルト質粘土。長径２～0.5cm 大少粒混。しまりややあり、粘性あり。 2：灰色（5YN/1）粘土。しまりややあり、粘性あり。長径１～2 粒混。土器出土。	土師器壺破片
4	SE57	I11H23、I12H・9・8	4.48	0.25～0.64	0.10	1：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘質シルト。しまりあり、粘性あり。長径0.5cm 大多粒。0.2～0.4cm 大少粒混。 2：オリーブ黒色（2.5GY5/1）細質シルト。暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘質土が混じる。しまりあり、粘性あり。	土師器壺破片
4	SD01	I32J2	1.02	0.25	0.06	1：オリーブ黒色（10Y3/2）細砂・粘土質シルト。しまりややあり、粘性ややあり。	なし
4	P6	I22H	0.20	0.18	0.06	1：灰オリーブ色（5Y5/2）細砂質粘土。しまりあり、粘性あり。2：灰オリーブ色（5Y5/2）細砂。しまりあり、粘性ややあり。	なし
4	P14	I22H15	直径 0.26		0.05	1：褐灰色（10YR5/1）細砂・シルト質粘土。しまりややあり、粘性あり。	なし
4	P16	I33H10	0.29	0.23	0.40	1：灰色（7.5Y5/1）粘土質シルト。長径３～0.4cm 大少粒混。しまりあり、粘性あり。 2：灰色（10Y5/1）粘土。長径４～0.5cm 大多粒混。しまり強い。粘性強い。 3：灰色（7.5Y5/1）粘土質シルト。長径４～0.5cm 大多粒混。しまり強い。粘性強い。1～3 層から土器出土。	土師器壺破片
4	P17	I33H10	0.26	0.22	0.08	1：灰色（7.5Y4/1）粘質土。長径２～0.3cm 大多粒混。しまりあり、粘性あり。 2：灰色（10Y5/1）細質シルト。しまりあり。粘性あり。	土師器壺破片
4	P21	I33G10・15	0.35	0.29	0.08	1：灰色（10Y5/1）粘質土。長径２～0.3cm 大多粒混。しまりあり、粘性あり。 2：灰色（7.5Y5/1）粘質シルト。長径0.5cm 少粒混。しまりあり、粘性あり。	なし
4	P28	I33G10・15	0.36	0.35	0.10	1：灰オリーブ色（7.5Y5/2）シルト質粘土。長径２～0.3cm 大少粒混。しまりややあり、粘性あり。 2：灰オリーブ色（7.5Y5/2）粘土質シルト。しまりややあり、粘性あり。1 層がより粘ねい。土器がややかたまりとなり多く混じる。	土師器壺破片
4	P30	I32J	0.40	0.35	0.25	1：オリーブ黒色（10Y5/2）粘砂質シルト。しまりあり、粘性ややあり。2：灰色（10YR5/1）粘土。長径５～1cm 大こくや粒混。しまりややあり、粘性あり。	なし
4	P32	I33I11	0.21	0.19	0.31	1：灰色（5Y5/1）シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。 2：オリーブ黒色（10Y5/2）粘土。しまりあり、粘性あり。	なし
4	P33	I33I14	0.25	0.23	0.09	1：オリーブ黒色（10Y5/2）シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。	なし
4	P34	I33I14	0.25	0.23	0.06	1：オリーブ黒色（10Y5/2）シルト質粘土。しまりあり、粘性あり。	なし
4	P35	I33I4・10	0.20	0.24	0.05	1：灰オリーブ色（5Y4/2）細砂・粘土質シルト。長径２～3mm 大少粒混。しまりあり、粘性ややあり。	弥生土器片、礫 図版 3-21
4	P37	I33I20	0.38	0.26	0.37	1：オリーブ黒色（10Y5/2）細砂・粘土。しまりあり、粘性あり。やや くすむ	土師器壺破片
4	P38	I33I20	0.46	0.33	0.13	1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。長径２～0.3cm 大少粒混。しまりややあり、粘性あり。	土師器壺破片
4	P46	I33I21	0.41	0.30	0.10	1：灰色（5YA/1）シルト質粘土。褐鉄が粒混じり、長径１～2cm 大多粒混。しまりややあり、粘性あり。	なし
4	P48	I33I25	0.45	0.37	0.10	1：灰色（7.5YA/1）シルト質粘土。長径２～0.5cm 大少粒混。しまりあり、粘性あり。	土師器壺破片

図版No.	区画		規模（m）			土質注記	遺物
	遺構名	グリッド	長径	短径	深さ		
	P49	1222	0.37	0.32	0.15	1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘土。深さ1～0.5cm大少雑混。しまりあり。粘性あり。	なし
	P52	1337	長径 0.32		0.32	1：灰色（10YR/1）シルト質粘土。深さ～2cm大少雑混。しまりややあり。粘性あり。	土師器壁破片
	P53	1435	0.28	0.26	0.10	1：オリーブ灰色（5GY5/1）シルト質粘土。しまりややあり。粘性あり。	土師器底破片
	P56	1434	0.37	0.32	0.13	2：オリーブ灰色（5GY5/1）シルト質粘土。しまりややあり。粘性あり。	土師器杯・壁破片 図版6-22
4	SX6	1119222	0.63	0.46	0.08	1：灰色（5Y5/1）シルト質粘土。炭1cm大ごく少雑混。しまりあり。粘性あり。土器出土。	土師器壁破片
4	SX16	1312・13・17・18	2.72	2.26	0.32	1：灰色（5Y5/1　細砂質粘土。土器より砂気が強い。しまりややあり。粘性あり。 2：灰色（5Y5/1）細砂質粘土。しまりややあり。粘性あり。	土師器高杯・壁破片 図版6-23
4	SX19	1311・12	0.77	0.44	0.05	1：にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂・シルト質粘土。しまりあり。粘性あり。 2：灰色（5Y5/1）細砂・シルト質粘土。しまりあり。粘性あり。	なし
4	SX20	1332・3・7・8	1.04	1.24	0.05	1：灰色（10Y5/1）砂質粘土。しまりややあり。粘性あり。	土師器壁破片
3	SX25	1309・10・14・15・20	4.05	1.52	0.22	1：オリーブ灰色（10Y4/2）シルト質粘土。しまりややあり。粘性あり。炭0.2～0.3mm大少雑混。 2：灰色（10Y5/1）シルト質粘土。しまりややあり。粘性あり。上部より白っぽい。 3：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト。しまりややあり。粘性あり。0.5mm大炭少雑混。	土師器壁・壁破片 図版6-24
4	SX43	1439	0.73	0.58	0.05	1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。しまりややあり。粘性あり。	土師器壁破片
4	SX55	1431・4	1.27	0.97	0.07	1：灰色（7.5Y4/1）シルト質粘土。しまりややあり。粘性あり。	土師器高杯・壁等 図版6-25
4	土器集中地点1	1222・1312	2.00	1.50			土師器・壁・高杯等 図版6-26・27
4	土器集中地点2	1304・5・9・10	1.00	0.60			土師器・高杯・甕・壁等 図版7-28～33

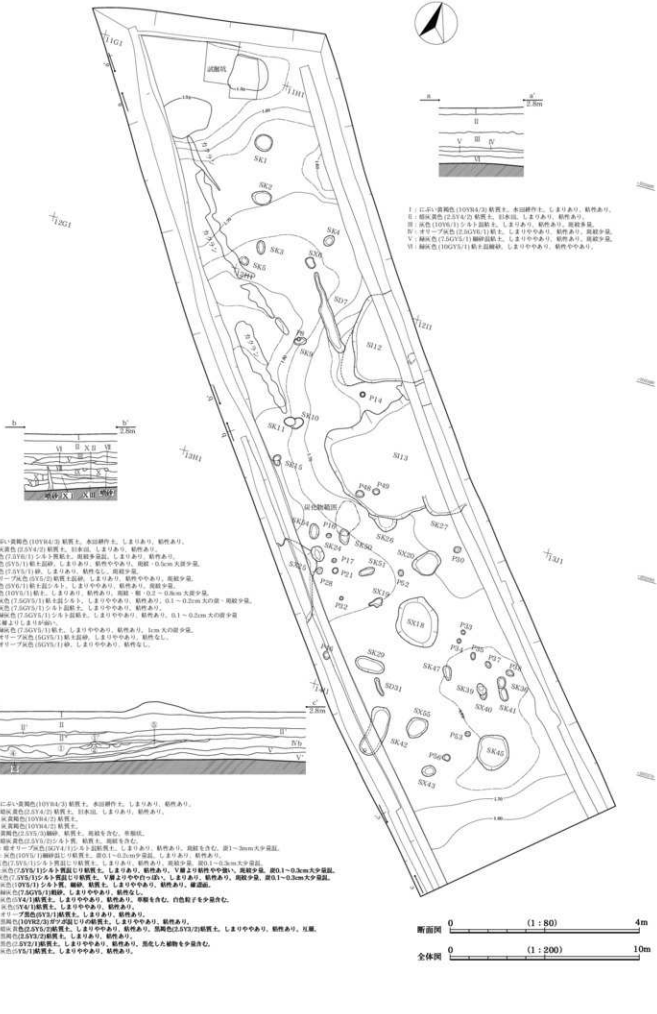
調査に参加した皆さん

別表２　遺物一覧

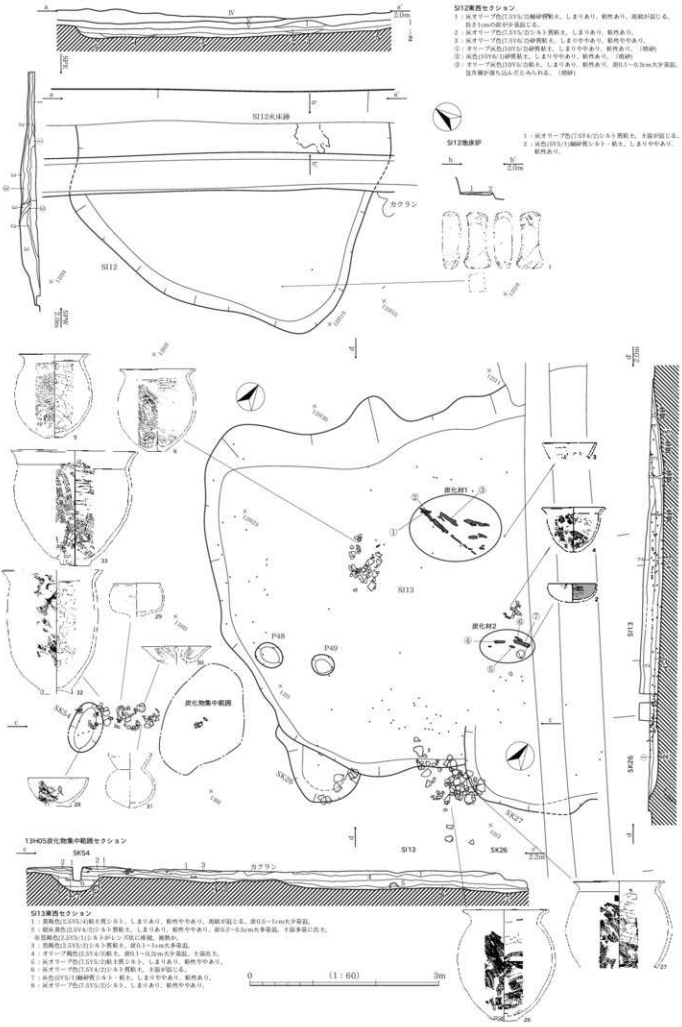
図版No.	遺物No.	出土遺構 グリッド	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	成形等 口径	底径	備考	胎土	色調	調整 口縁部	体部	底部
5	1	12E10	SI12	6	石器品	磨石	(長) 15.0	(巾) 6.8	(厚) 4.4	—	—	—	—	—			
	2	12E17	SI13	3	黒色土器	坏	12.3	—	5.0	16/36	—	○	0.5～1mm大 砂・雲・多	灰黄2.5Y7/2（外面）、褐灰2.5Y 5/1（内面）		内外ヘラミガキ	
	3	12E16	SI13	2	土師器	鉢	14.3	—	—	4/36	—	○	0.5～2mm大 石・角・雲・多	灰黄2.5Y 7/2	外縦ナデ	外ハケメ 内ハケメ	
	4	12E17	SI13	4	土師器	壺	16.0	3.6	11.8	9/36	6/36	○	0.5～1mm大 石・雲・少	にぶい橙7.5YR7/4	内横ナデ	外ハケメ 内ハケメ・ハケメ	
	5	12E20	SI13	2	土師器	壺	18.7	4.7	22.2	19/36	36/36	○	0.5～1mm大 石・雲・少	橙2.5YR6/6	内外横ナデ	外ハケメ、内面部付近ハケメ、底ケズリ	内ハケメ
	6	12E16	SI13	2	土師器	壺	19.9	4.0	22.5	29/36	36/36	○	0.5～2mm大 石・角・雲・少	にぶい橙7.5YR7/4	内外横ナデ	外ハケメ 内ケズロ	
	7	12E21	SI13	3	土師器	壺	22.0	—	—	8/36	—	○	0.5～2mm大 石・雲・多	褐灰10YR6/6	内外横ナデ	内外ハケメ	
	8	12E21	SI13	2	土師器	壺	—	4.6	—	—	36/36	○	0.5～2mm大 石・雲・多	褐灰10YR6/6			内外ハケメ
	9	12E16、12E25	SI13	2・4	土師器	甕	16.0	—	—	2/36	—	△	0.5～2mm大 石・雲・多	褐灰明10YR6/3	外縦ナデ、頸部ヘラミガキ		
	10	11C10	SK4	1	土師器	壺	17.2	—	—	14/36	—	○	0.5～2mm大 石・雲・砂・雲・少	にぶい黄橙10YR7/4	内外横ナデ	内外ハケメ	
	11	11C10	SK4	1	土師器	壺	—	3.6	—	—	36/36	○	0.5～2mm大 石・雲・砂・雲・少	にぶい黄橙10YR7/4		外ハケメ 内ケズロ	内ハケメ
6	12	11H11	SK2		土師器	壺	—	—	5.8	—	12/36	○	0.5～2mm大 石・雲・少	褐灰明10YR6/3	内外横ナデ	外ハケメ、内面部付近ハケメはミガキ	
	13	11H11	SK2		土師器	壺	—	5.8	—	—	12/36	○	0.5～2mm大 石・雲・少	褐灰明10YR6/3			
	14	11H10	SK4	1	土師器	壺	16.2	—	—	24/36	—	○	1～2mm大 石・雲・少	にぶい黄橙10YR6/4	内外横ナデ	外ハケメ・ハケメ 内ハケメ	
	15	11H21	SK5	1	土師器	壺	14.4	—	—	35/36	—	○	0.5～2mm大 石・角・雲・多	にぶい黄橙10YR7/4	外ハケメ 内ハケメ	外ハケメ 内ハケメ	
	16	12E23	SK15	1	土師器	坏	—	6.0	—	—	—	○	0.5mm大 石・角・雲・ごく少	灰白10YR8/2		内外ヘラミガキ	
	17	13H15	SK24	1	土師器	高坏	19.5	—	—	1/36	—	△	0.5～1mm大 石・雲・多		外ハケメ→ヘラミガキ		
	18	13E20	SK39	1	土師器	坏	15.5	—	5.0	6/36	—	○	0.5mm大 石・角・雲・多	にぶい黄7.5YR7/3		外ハケメ→ヘラミガキ 内ヘラミガキ	
	19	14E5	SK45	V	土師器	坏	15.2	—	—	23/36	—	○	0.5～2mm大 石・雲・少	にぶい黄橙10YR7/3		外ヘラミガキ	
	20	14E1	SK45	1	土師器	高坏	20.0	—	—	1/36	—	△	0.5～1mm大 石・角・骨・多	灰黄2.5Y6/2	外ハケメ→ヘラミガキ		
	21	13E19	P95	1	黒色土器	坏	14.0	—	—	2/36	—	○	0.5～2mm大 石・雲・多	にぶい黄橙10YR7/3（外面）、褐灰10YR5/1（内面）		内外ヘラミガキ	
	22	14E4	P56	1	土師器	坏	15.3	—	—	—	—	○	0.5～2mm大 骨・雲・多	灰黄2.5 Y 7/2			
	23	13E12	SX18	1	土師器	高坏	18.3	—	—	5/36	—	△	0.5～2mm大 角・雲・多	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部ナデ、坏部外ヘラミガキ		
	24	13E15	SX25	2	土師器	鉢	14.0	5.2	6.4	7/36	36/36	○	0.5～1mm大 石・雲・砂・少	灰白10YR8/2	外縦ナデ	外ハケメ→ナデ 内ハケメ	
	25	14E5	SX55	1	土師器	高坏	—	—	—	—	—	△	0.5～1mm大 石・雲・多	にぶい黄橙 10YR7/2	外ハケメ→ヘラミガキ		
	26	12E22		V	土師器	壺	22.2	7.0	29.1	—	—	○	0.5～2mm大 石・骨・雲・少	にぶい黄7.5YR7/4	内外横ナデ	外ハケメ、内面部付近ケズリ、底ヌノハケメ	
	27	13I1		V	土師器	壺	24.0	—	—	5/36	—	○	0.5～2mm大 石・雲・多	にぶい黄橙10YR7/4	内外横ナデ	外ハケメ 内ケズロ、ヌノ底ハケメ	
7	28	13H5		V	土師器	鉢	16.2	6.6	7.6	11/36	36/36	○	0.5～1mm大 石・砂・少	灰白2.5Y8/2	外縦ナデ	外ハケメ→ナデ 内ハケメ	
	29	13H6		V	土師器	高坏	12.4	—	—	1/36	—	○	0.5～1mm大 石・骨・雲・多	淡黄2.5Y7/4	坏部外ヘラミガキ		
	30	13H6		V	土師器	高坏	19.2	—	—	14/36	—	○	0.5～1mm大 骨・雲・多	にぶい黄橙 10YR7/2	坏部外ハケメ→ヘラミガキ		
	31	13H6		V	土師器	甕	12.4	—	14.5	33/36	—	○	0.5～1mm大 石・骨・雲・少	黒褐色2.5YR2/4			
	32	13H4		V	土師器	壺	19.8	8.0	—	3/36	32/36	○	0.5～2mm大 石・雲・多	にぶい黄橙 10YR6/3	外ハケメ→ナデ 内横ナデ	外ハケメ 内ケズロ	
	33	13H10		V	土師器	壺	33.3	7.8	30.0	18/36	36/36	○	0.5～2mm大 石・雲・多	褐灰明 10YR6/4	内外横ナデ	内外ハケメ	
	34	12I22		V	土師器	甕	11.6	5.8	—	4/36	—	○	0.5～1mm大 骨・骨・多	にぶい橙 7.5YR6/4		内横ハケデ 外ハケメ→ヘラミガキ	
	35	12I22		V	土師器	甕	13.4	5.4	6.0	23/36	—	○	0.5～1mm大 石・骨・雲・少	橙5YR7/8			
	36	12I17		V	土師器	坏	14.0	—	—	18/36	—	○	0.5～1mm大 石・雲・多	橙5YR6/6		外ナデ	
	37	12H18		V	土師器	坏	14.2	5～6	5.9	3/36	36/36	○	0.5～2mm大 骨・雲・多	にぶい黄橙 7.5YR7/3			
	38	12I23		V	土師器	坏	14.4	4.8	6.6	36/36	36/36	◎	0.5～2mm大 石・雲・骨・雲・多	橙橙5YR6/2	内外ヘラミガキ		
	39	13I24		V	土師器	坏	15.6	5.0	7.2	18/36	36/36	○	0.5～2mm大 石・雲・多	褐灰明10YR6/3	外ハケメ→ヘラミガキ 内ヘラミガキ		
	40	13I8		V	土師器	坏	16.6	—	—	16/36	—	○	0.5～2mm大 石・雲	にぶい黄橙 10YR7/2	内外ヘラミガキ		
	41	12H19		V	土師器	坏	13.9	—	4.8	/36	—	○	0.5～2mm大 石・雲・多	橙 7.5YR7/6			
	42	12H12		V	土師器	坏	13.8	—	—	7/36	—	◎	0.5～1mm大 石・雲・少	にぶい橙 5YR7/4			

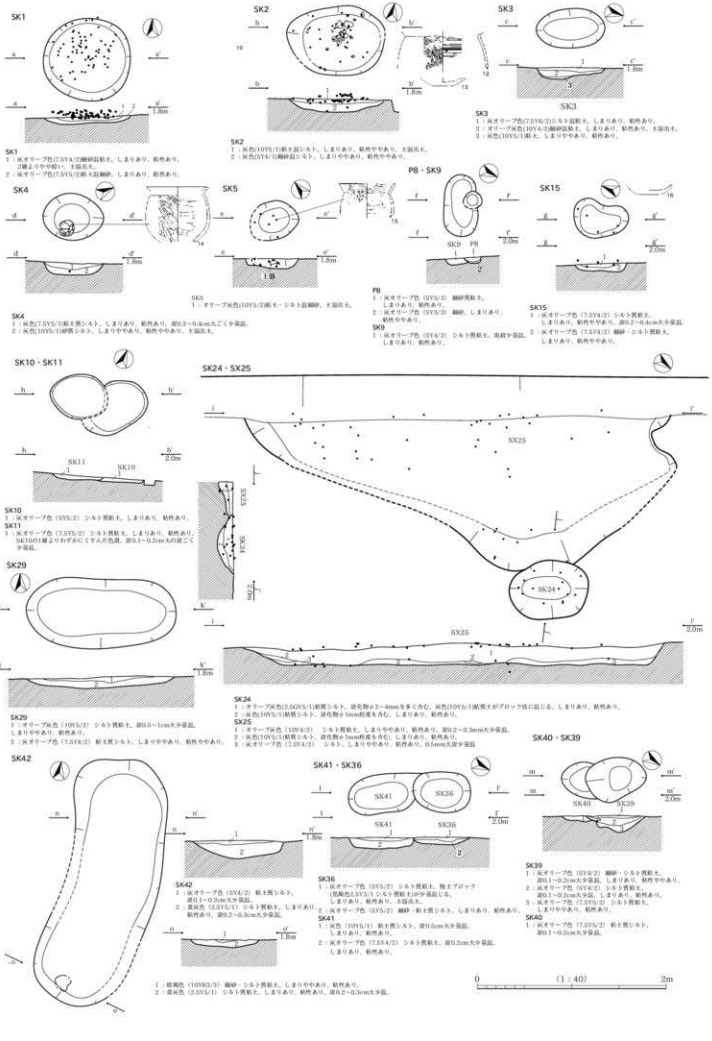
別　表

図版No.	図正No.	出土位置 グリッド	遺構	層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	成形	調整	胎土 混和材	色調	調整 口縁部	体部	底部
8	43	12H16		V	土師器	坏	14.4	5.0	6.0	20/36	36/36	○	0.5～2mm 大、石・雲母・角・黒・茶 少	光沢10YR8/2（外面）、明度10YR7/3（内面）		内外ヘラミガキ
	44	12H7		V	土師器	坏	15.2	6.2	6.3	1/36	9/36	○	0.5～2mm 大、石・雲母・角・黒 少	明度2.5YR6/6（外面）、明度10YR8/3（内面）		
	45	12H19		V	土師器	鉢	17.9	–	–	5/36	–	△	0.5～1mm 大、石・雲母・黒 少	浅黄2.5YY7/3	外横ナデ	内外ハケメ→ナデ
	46	13E21		V	土師器	高坏	17.0	–	–	11/36	–	○	0.5～2mm 大、石・雲母・黒・茶 多	黒色10YR8/2	杯部外ハケメ→ヘラミガキ、脚部外ハケメ→ヘラミガキ	
	47	13E10		V	土師器	高坏	17.8	–	–	9/36	–	△	0.5mm 大、石・黒・茶 多	明 5YR7/8	杯部外ハケメ、内ハケメ→ヘラミガキ	
	48	13H4		V	土師器	高坏	17.8	–	–	28/36	–	○	0.5～2mm 大、石・赤・黒・角・茶 多	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部付近内外ナデ、杯部外ハケメ→ヘラケズリ、内ハケ→ナデ	
	49	13H5		V	土師器	高坏	18.4	–	–	31/36	–	○	0.5mm 大、石・黒・茶 少	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部付近内外ナデ、杯部外ハケメ→ヘラミガキ	
	50	13H6		V	土師器	高坏	18.6	14.2	12.8	34/36	11/36	△	0.5～2mm 大、石・赤・黒・角・茶 多	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部付近内外ナデ、杯部外ハケメ→ヘラミガキ	
	51	13H4		V	土師器	高坏	19.0	–	–	19/36	–	○	0.5～1mm 大、石・黒・赤・角・茶 多	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁部付近内外ナデ、杯部外ハケメ→ヘラミガキ	
	52	13I7		I	土師器	高坏	20.0	4.0	–	26/36	–	△	0.5～2mm 大、石・赤・黒・角・茶 多	にぶい橙 10YR7/3	口縁部付近内外ナデ、杯部外ハケメ→ヘラミガキ	
	53	13I6		V	土師器	高坏	16.1	–	–	2/36	–	△	0.5～2mm 大、石・赤・角 多	灰黄2.5Y7/2	杯部外ハケメ→ヘラミガキ	
	54	13I8		V	土師器	高坏	22.0	–	–	6/36	–	○	0.5～1mm 大、石・黒・茶 少	褐灰10YR5/1	杯部内外ヘラミガキ	
	55	13H5		V	土師器	高坏	–	14.2	–	15/36	–	○	0.5～1mm 大、石・黒・茶 少	にぶい橙 7.5YR7/3	脚部外ハケメ	
	56	14I5		V	土師器	高坏	–	–	–	–	–	○	0.5～1mm 大、石・黒・茶 少	褐灰 10YR5/1	杯底部外ハケメ→ミガキ、内ナデ、脚部との接合部ハケメ、脚部内ハケメ	
	57	12H10		V	土師器	高坏	–	12.2	–	–	36/36	○	0.5～2mm 大、石・赤・角・雲・黒・茶 多	にぶい橙 7.5YR7/3	杯底部外ミガキ、脚部との接合部ハケメ、脚部内ナデ	
	58	13H5		V	土師器	高坏	–	19.4	–	–	1/36	○	0.5～2mm 大、石・角・赤・黒 少	にぶい橙 10YR7/3	脚部外横ナデ→ヘラミガキ、内横ナデ	
	59	13I6		I	土師器	坏	10.6	–	13.9	–	11/36	△	1～3mm 大、石・赤・黒	にぶい褐 7.5YR6/3	外ハケメ→ヘラケズリ	内ハケメ
	60	12H23		V	土師器	坏	10.8	–	–	7/36	–	○	0.5～2mm 大、石・黒・茶	灰黄 2. 5Y7/2	外ハケメ→ナデか、内ハケメ→ナデか	
	61	12H24		V	土師器	坩	10.7	–	–	4/36	–	○	0.5～2mm 大、石・赤・黒・茶	にぶい黄橙 10YR7/3	外ハケメ→横ナデ	
	62	13I18		V	土師器	坩	–	6.4	–	–	22/36	△	0.5～1mm 大、石・角・赤・黒 少	浅黄 2.5Y8/3		外ヘラミガキ、内ハケメ
	63	13I4		V	土師器	手捏ね土器	4.0	4.5	4.8	–	–	×	0.5～2mm 大、石・黒・茶 少	灰黄 2.5Y6/2	内外指オサエ	
	64	12H32		V	須恵器	坏蓋	12.4	–	–	5/36	–	○	0.5～1mm 大、黒・こな 少	灰色 N5/		
9	65	13I21		V	土師器	壺	14.0	3.9	13.1	3/36	36/36	○	0.5～2mm 大、石・黒・茶 多	にぶい黄橙 10YR6/4	内外横ナデ	外ハケメ、内ハケメ
	66	13H5		V	土師器	壺	13.0	–	–	3/36	–	○	0.5～1mm 大、石・赤・角・黒・茶 少	にぶい黄橙 10YR7/3	内外横ナデ	外ハケメ、内ハケメ
	67	13H5		V	土師器	壺	–	6.8	–	–	33/36	○	0.5～1mm 大、石・赤・角・黒・茶 少	にぶい黄橙 10YR7/3	内外横ナデ	外ハケメ、内ハケメ
	68	14I5		V	土師器	壺	19.2	–	–	11/36	–	○	0.5～2mm 大、石・黒・茶 多	橙 7.5YR6/6	内外ハケメ→ヘラケズリ	内ハケメ→ナデ
	69	13H15		V	土師器	壺	20.9	–	–	4/36	–	○	1mm 大、石・黒・茶 少	にぶい黄橙 10YR7/2	内外横ナデ	外ハケメ、内ハケメ
	70	12I22		V	土師器	壺	24.0	–	–	12/36	–	△	0.5～2mm 大、石・黒・角・茶 少	にぶい黄橙 10YR7/3	内外横ナデ	外ハケメ、内ナデか、下半部ハケメ
	71	14I5		V	土師器	壺	25.8	–	10.3	1/36	–	△	0.5～1mm 大、石・黒・角・茶 少	浅黄 2. 5Y8/3	外横ナデ→ハケメ→ナデ、内横ナデ	外ハケメ、内ハケメ
	72	12H25		V	土師器	壺	23.5	6.2	29.8	4/36	36/36	○	0.5～1mm 大、石・角・茶 少	にぶい黄橙 10YR7/3	内外横ナデ	外ハケメ、内ハケメ→ヘラケズリ→ハケメ
	73	13I1		V	土師器	壺	–	3.5	32.0	–	36/36	△	0.5～2mm 大、石・赤・角・茶	灰黄褐 10YR4/2	外ハケメ、内横ナデ	外ハケメ、内ハケメ→ヘラケズリ→ハケメ　内外ヤスリ
10	74	14I5		V	土師器	壺	23.8	–	–	10/36	–	○	1～3mm 大、石・赤・雲・茶 少	にぶい黄橙 10YR7/3	内外横ナデ	内横磨付近ハケメ、以下ヤスリ
	75	14I5		V	土師器	壺	–	7.9	–	–	22/36	○	1～3mm 大、石・赤・雲・茶 少	にぶい黄橙 10YR7/3	内外横ナデ	内横磨付近ハケメ、以下ヤスリ
	76	13H10		V	土師器	壺	21.0	–	–	2/36	–	○	1～3mm 大、石・赤・角・茶 少	にぶい橙 10YR7/4	内外横ナデ	外ハケメ、内横磨付近ハケメ、以下ヤスリ
	77	13H10		V	土師器	壺	–	5.9	–	–	36/36	○	1～3mm 大、石・赤・角・茶 少	にぶい橙 10YR7/4	内外横ナデ	外ハケメ、内横磨付近ハケメ、以下ヤスリ
	78	13H10		V	土師器	壺	23.9	–	–	6/36	–	△	0.5～2mm 大、石・赤・角・茶 多	浅黄橙 7.5YR8/3（外面）、灰黄 2. 5Y6/3（内面）	内外ハケメ	内外ハケメ
	79	13H10		V	土師器	壺	–	7.6	–	–	26/36	△	0.5～2mm 大、石・赤・角・茶 多	浅黄橙 7.5YR8/3（外面）、黄灰 2. 5Y6/1（内面）	内外ハケメ	内外ハケメ


試掘坑
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SK38
SK39
SK40
SK41
SK42
SK43
SK44
SK45
SK46
SK47
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P48
P49
P50
P51
P52
P53
P54
P55
P56
SD31
SD37
SI12
SI13
SI14
SI15
SI16
SI17
SI18
SI19
SI20
SI21
SI22
SI23
SI24
SI25
SI26
SI27
SI28
SI29
SI30
SI31
SI32
SI33
SI34
SI35
SI36
SI37
SI38
SI39
SI40
SI41
SI42
SI43
SI44
SI45
SI46
SI47
SI48
SI49
SI50
SI51

遺構個別図 1　SI12・13　SK26・27（S = 1/60）





SK1
1：灰オリーブ色(7.5Y4/2)細砂混粘土。しまりあり，粘性あり。
2層より中位に多い。土器出土。
2：灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘土混細砂。しまりあり，粘性あり。

SK2
1：灰色(10Y5/1)粘土混シルト。しまりあり，粘性ややあり。土器出土。
2：灰色(5Y4/1)細砂混シルト。しまりややあり，粘性ややあり。

SK3
1：灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト混粘。しまりあり，粘性あり。
2：オリーブ灰色(10Y4/2)細砂混粘土。しまりあり，粘性あり。土器出土。
3：灰色(10Y5/1)粘土。しまりややあり，粘性あり。

SK4
1：灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト。しまりあり，粘性あり。炭0.3～0.4cm大ごく少量混。
2：灰色(10Y5/1)砂質シルト。しまりややあり，粘性ややあり。土器出土。

SK5
1：オリーブ灰色(10Y5/2)粘土・シルト混細砂。土器出土。

P8
1：灰オリーブ色（5Y5/2）細砂質粘土。
しまりあり，粘性あり。
2：灰オリーブ色（5Y5/3）細砂。しまりあり，
粘性ややあり。

SK9
1：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土。炭粒少量混。
しまりあり，粘性あり。

SK15
1：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。
しまりあり，粘性ややあり。炭0.2～0.4cm大少量混。
2：灰オリーブ色（7.5Y4/2）細砂・シルト質粘土。
しまりあり，粘性ややあり。

SK10
1：灰オリーブ色（5Y5/2）シルト質粘土。しまりあり，粘性あり。

SK11
1：灰オリーブ色（7.5Y5/2）シルト質粘土。しまりあり，粘性あり。
SK10の層よりわずかにくすんだ色調。炭0.1～0.3cm大の炭こく少量混。

SK24
1：オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘質シルト。炭化粒径2～4mmを多くふむ。灰色(10Y5/1)粘質土がブロック状に混じる。しまりあり，粘性あり。
2：灰色(10Y5/1)粘質シルト。炭化粒径1mm程度を含む。しまりあり，粘性あり。

SX25
1：オリーブ灰色（10Y4/2）シルト質粘土。しまりややあり，粘性あり。炭0.2～0.3mm大少量混。
2：灰色(10Y5/1)粘質シルト。炭化粒径1mm程度を含む。しまりあり，粘性あり。
3：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト。しまりややあり，粘性あり。0.5mm大炭少量混

SK29
1：オリーブ灰色（10Y5/2）シルト質粘土。炭0.5～1cm大少量混。
しまりややあり，粘性あり。
2：灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘土質シルト。しまりややあり，粘性ややあり。

SK42
1：暗褐色（10YR3/3）細砂・シルト質粘土。しまりややあり，粘性あり。
2：黄灰色（2.5Y5/1）シルト質粘土。しまりあり，粘性あり。炭0.2～0.3cm大少量。

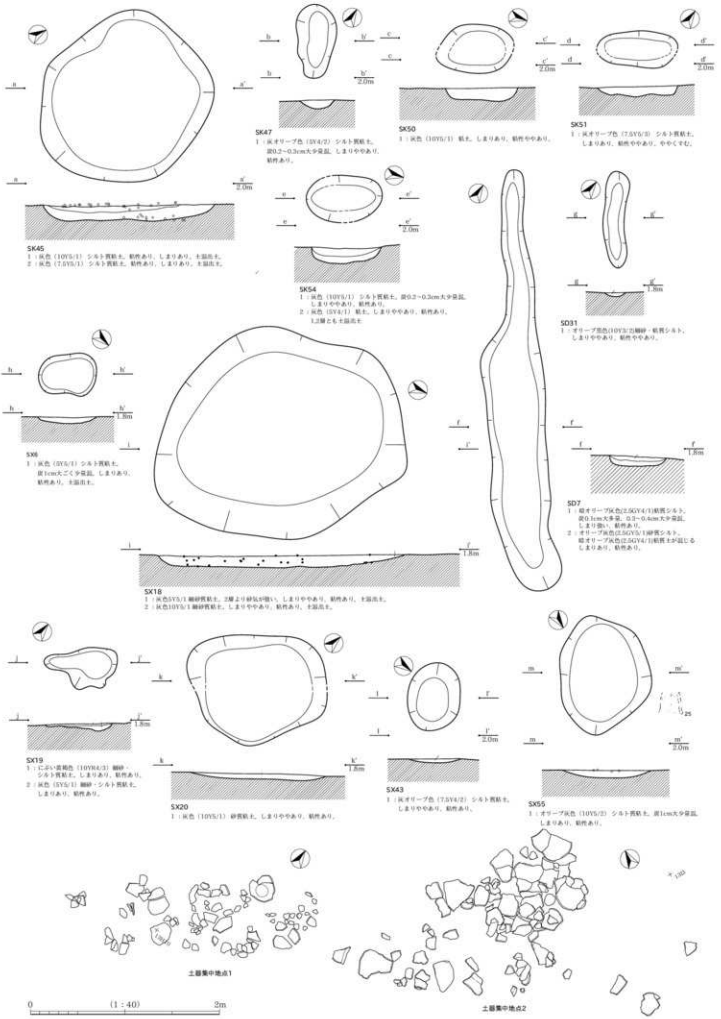
SK36
1：灰オリーブ色（5Y5/2）シルト質粘土。焼土ブロック
（黒褐色5YR3/1シルト質粘土）が少量混じる。
しまりあり，粘性あり。土器出土。
2：灰オリーブ色（5Y5/2）細砂・粘土質シルト。しまりあり，粘性あり。

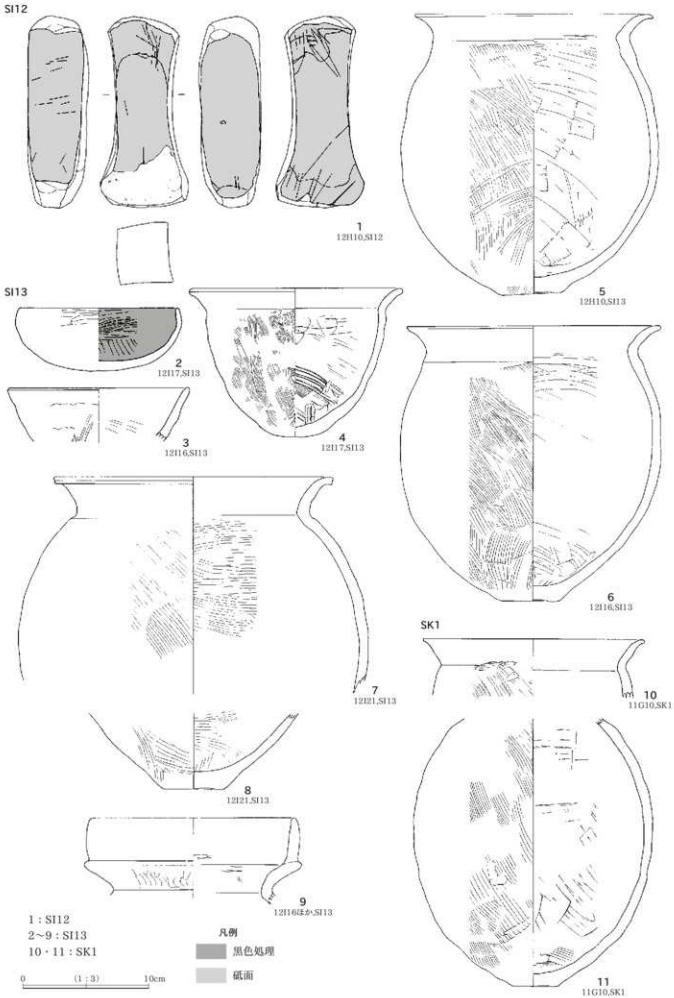
SK41
1：灰色（10Y5/1）粘土質シルト。炭0.5cm大少量混。
しまりあり，粘性あり。
2：灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土。炭0.2cm大少量混。
しまりあり，粘性あり。

SK39
1：灰オリーブ色（5Y4/2）細砂・シルト質粘土。
炭0.1～0.2cm大少量混。しまりあり，粘性ややあり。
2：灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土。
炭0.1～0.2cm大少混。しまりあり，粘性あり。
3：灰オリーブ色（7.5Y5/2）シルト質粘土。
しまりややあり，粘性あり。

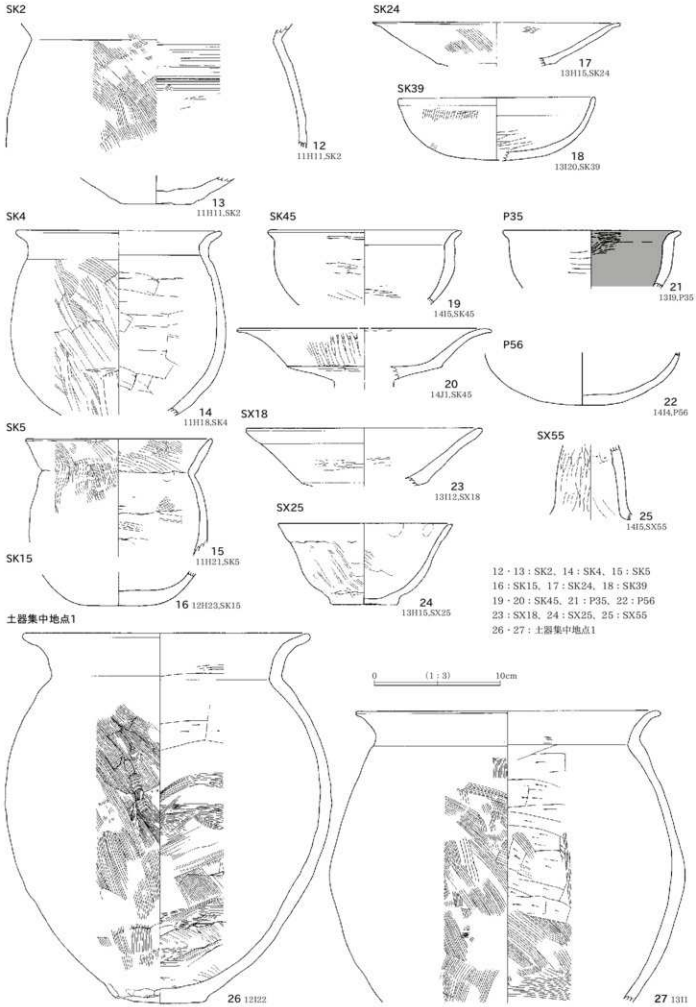
SK40
1：灰オリーブ色（7.5Y5/2）粘土質シルト。
炭0.1～0.2cm大少量混。

図版４　遺構個別図３　SK45・47・50・51・54　SD7・31　SX6・18～20・43・55　土器集中地点１・２（S＝1/40）

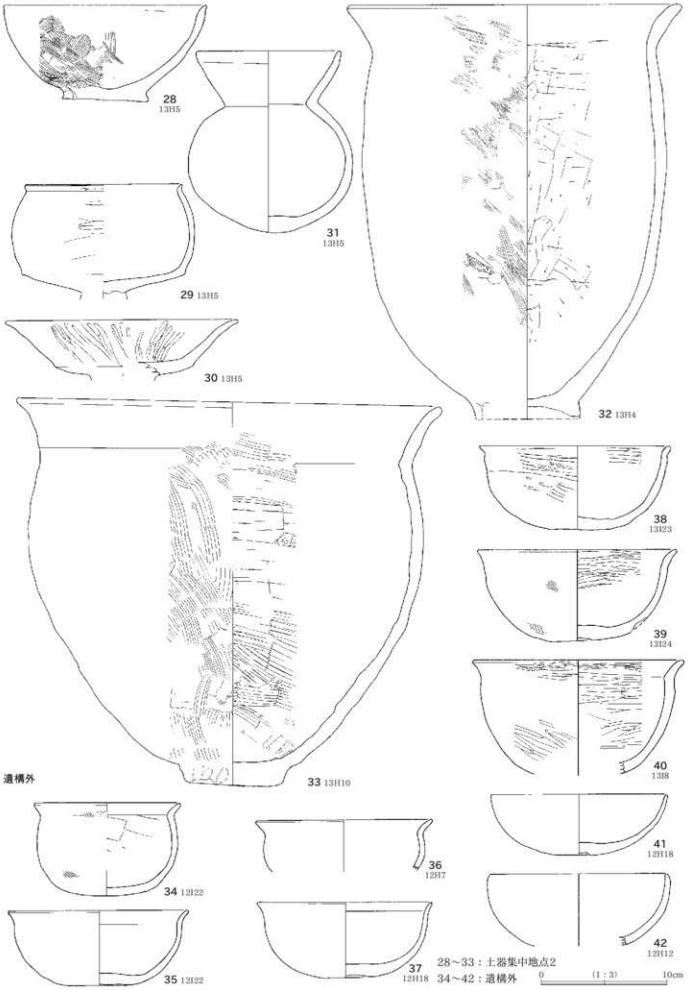


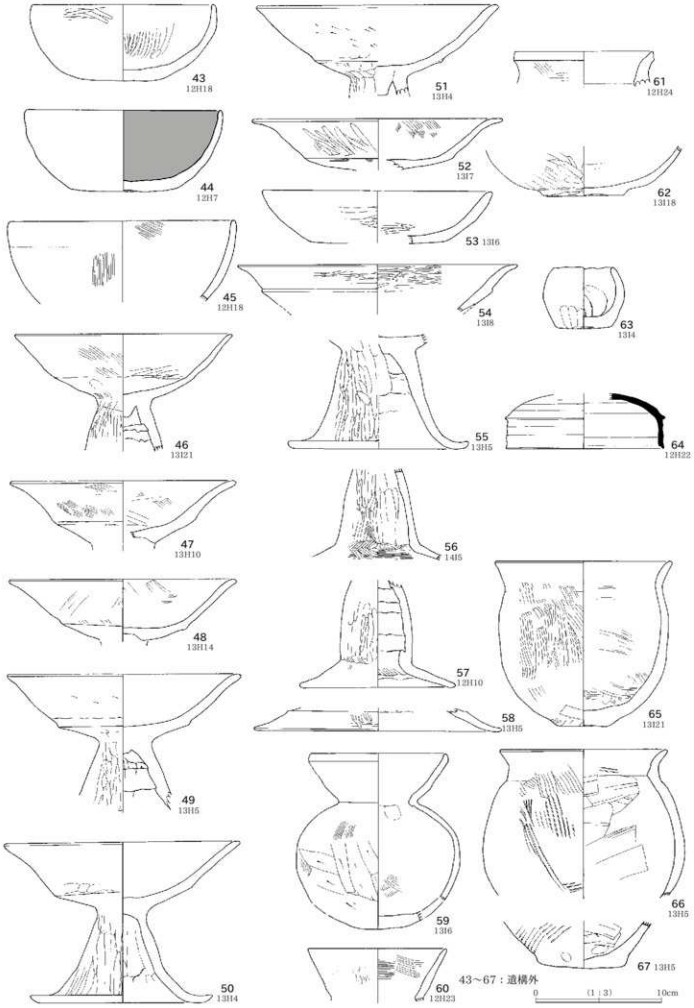

SI12
1
12H10,SI12
5
12H10,SI13
SI13
2
12I17,SI13
3
12I16,SI13
4
12I17,SI13
6
12I16,SI13
7
12I21,SI13
SK1
10
11G10,SK1
8
12I21,SI13
9
12I16ほか,SI13
11
11G10,SK1
1：SI12
2～9：SI13
10・11：SK1
凡例
黒色処理
砥面
0
(1：3)
10cm

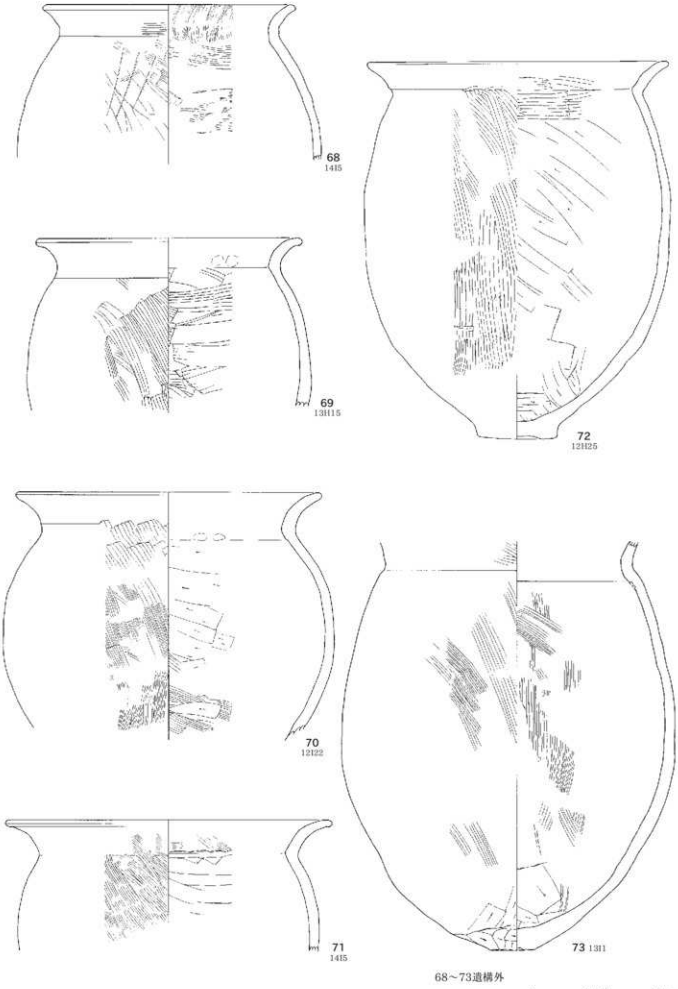
図版 6　遺物 2　遺構出土遺物 2　SK2・4・5・15・24・39・45　P35・56　SX18・25・55　土器集中地点 1　(S = 1/3)



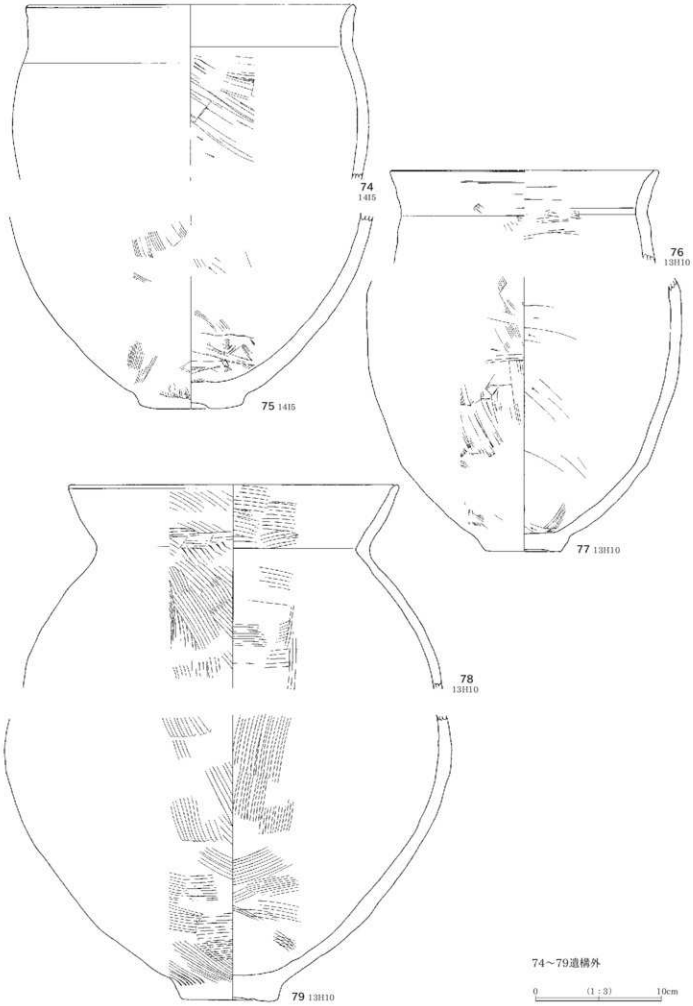
土器集中地点2


28
13H5
31
13H5
29 13H5
30 13H5
32 13H4
33 13H10
38
13I23
39
13I24
40
13I8
遺構外
34 12I22
36
12H7
41
12H18
35 12I22
37
12H18
42
12H12
28～33：土器集中地点2
34～42：遺構外
0
(1：3)
10cm


43
12H18
44
12H7
45
12H18
46
13I21
47
13H10
48
13H14
49
13H5
50
13H4
51
13H4
52
13I7
53 13I6
54
13I8
55
13H5
56
14I5
57
12H10
58
13H5
59
13I6
60
12H23
61
12H24
62
13I18
63
13I4
64
12H22
65
13I21
66
13H5
67 13H5
43～67：遺構外
0
(1：3)
10cm


68
14I5
69
13H15
72
12H25
70
12I22
71
14I5
73 13I1
68～73遺構外
0
(1：3)
10cm

遺物 6　遺構外出土遺物 4　(S = 1/3)



遺跡周辺の航空写真 （1947 年撮影　国土地理院）

調査区完掘 （南から）

表土除去・暗渠設置　（北から）

東壁　北から 11m 地点（西から）

東壁　北から 42m 地点　（西から）

北西角から 28 ～ 29m 地点　西側暗渠内土器出土

包含層掘削

土器集中地点 2 と炭化物集中範囲（右側）（南から）

土器集中地点 2　（北から）

土器集中地点 2　（北から）

調査区横断（13H5 グリッド） 土層堆積 （南から）

遺構確認面 精査

SI12 土層堆積 （西から）

SI12 地床炉 （西から）

SI12 地床炉 土層堆積 （北から）

SI12 完掘 （北西から）

SI12 砥石出土 （北西から）

土器集中地点 1 と SI13・SK27 の土層堆積 （南から）

SI13　2 層　土層堆積 （東から）

SI13　炭化材出土 （北から）

SI13　黒色土器杯と炭化材出土 （東から）

SI13　4 層上面　土師器出土 （北から）

SI13・SK26・SK27　完掘 （南から）

SK27　完掘 （南から）

遺物水洗

SK1　土層堆積　（南から）

SK1　完掘　（南から）

SK2　土器出土　（南から）

SK2　完掘　（南から）

SK3　土層堆積　（東から）

SK3　完掘　（東から）

SK4　土層堆積　（南東から）

SK4　土器出土　（南東から）

SK4　完掘　（南東から）

SK5　土器出土　（西から）

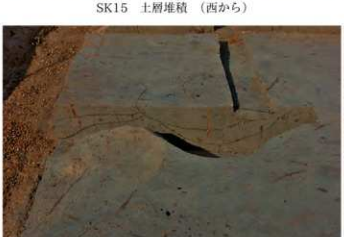
SK5　完掘　（西から）

左から　SK9・P8　土層堆積　（東から）

左から　SK9・P8　完掘　（東から）

SK15　土層堆積　（西から）

SK15　完掘　（西から）



左から　SX25・SK24　土層堆積　（南から）

左から　SX25・SK24　完掘　（南から）

SX25　土層堆積　（東から）

左から　SK40・SK39　完掘　（南から）

SK42　土層堆積　（南から）

13I・14I・14J グリッド　遺構完掘　（西から）

SK45　土層堆積　（東から）

SK45　完掘　（東から）

SX19　土層堆積　（南東から）

SX19　完掘　（南東から）

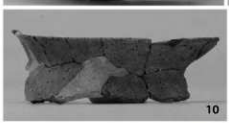
SX55　土層堆積　（東から）

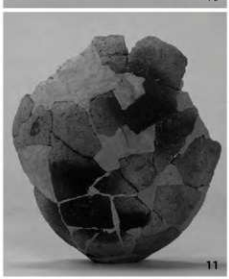
SX55　完掘　（東から）

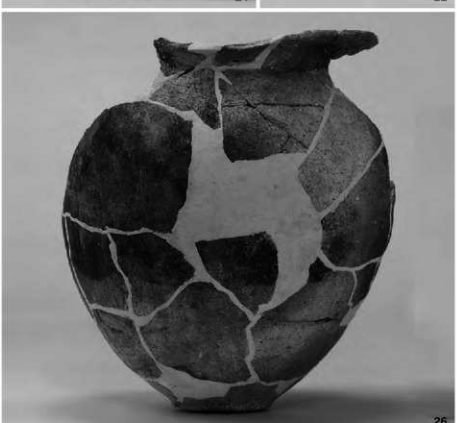
P56　土師器杯出土　（南から）

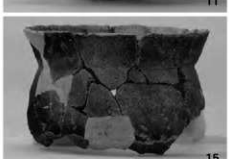
P35　土層堆積　（東から）

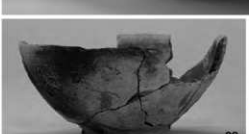
古墳時代の遺物 1



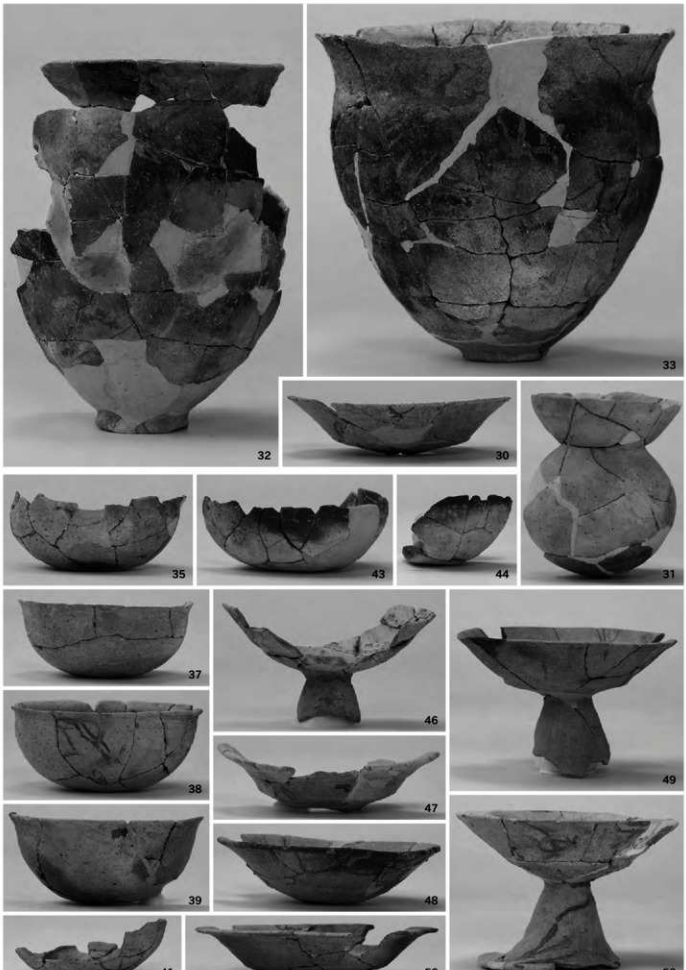




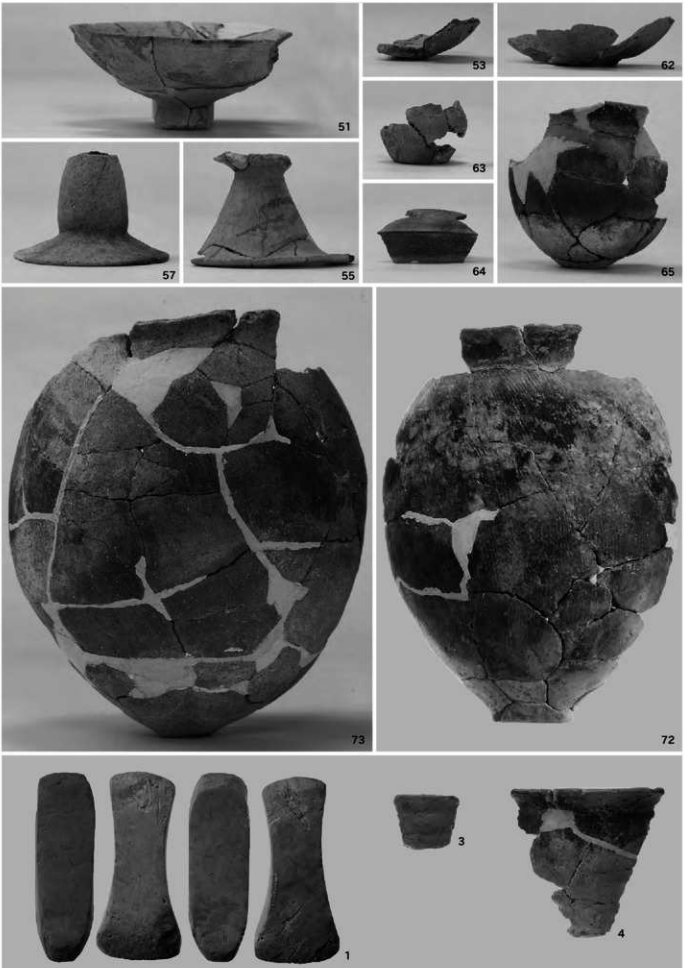


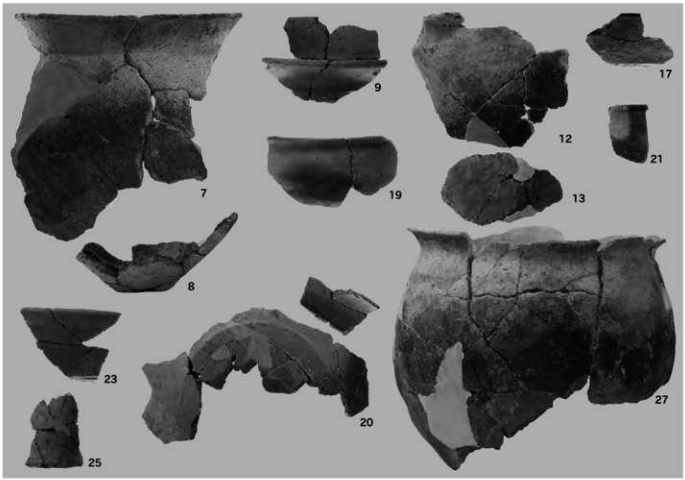


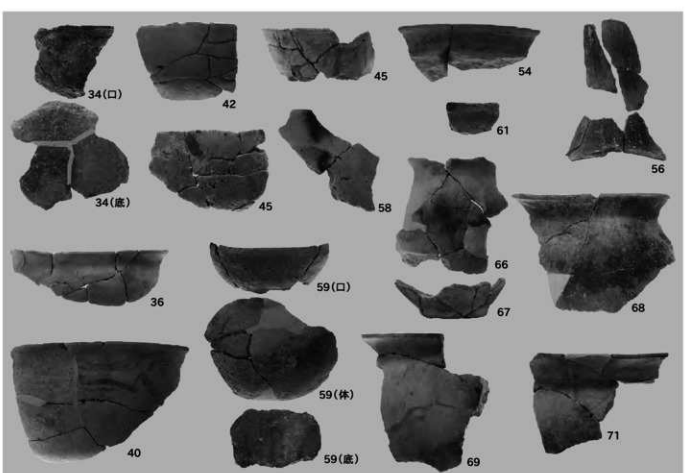
古墳時代の遺物 2



古墳時代の遺物 3

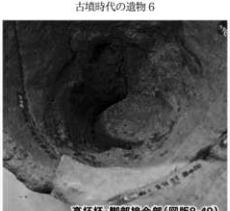

51
53
62
63
57
55
64
65
73
72
1
3
4

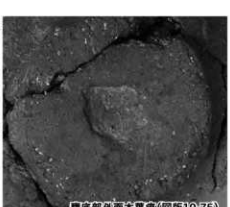

7
9
12
17
21
19
13
8
23
20
27
25


34(口)
42
45
54
61
56
34(底)
45
58
66
36
59(口)
67
68
59(体)
40
59(底)
69
71

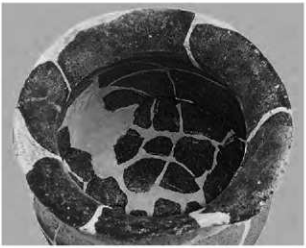
古墳時代の遺物 6

杯底部外面(図版7-41)


高坏杯・脚部接合部(図版8-49)


甕底部外面木葉痕(図版10-75)

杯・高杯・甕の底部成形



1-①類

6	5	

1-②類

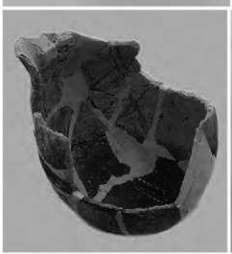
65	26	72

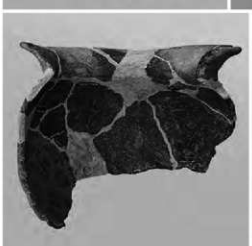
2類

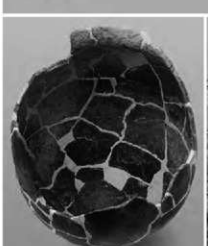
70	32	33

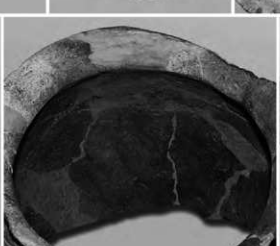
その他

73	27	14









スス・コゲの付着状況（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	なかだいせき　だい２じちょうさ
書名	中田遺跡　第２次調査
副書名	市道荻川新津線道路改良事業に伴う中田遺跡第２次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	笹澤（諫山）えりか
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター
所在地	〒950-3101　新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地　025-255-2006
発行年月	西暦 2009 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかだいせき 中田遺跡	にいがたけ にいがたし 新潟県 新潟市 あきまち ちゅうがくまえ 秋葉区 結 字中 だ 784-4 番地 ほか	15105	739	37° 51′ 36″	139° 06′ 25″	20081006 ～ 20081215	518 ㎡	道路改良事業に伴う本発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中田遺跡	集落跡	古墳時代中期後半～後期前半	竪穴状遺構・土坑・溝・性格不明遺構・ピット	土器（土師器・黒色土器・須恵器）・石製品（砥石・軽石）	

要約

中田遺跡は，信濃川・能代川・小阿賀野川に囲まれた氾濫原の中にある標高約 1.8m 前後の埋没した自然堤防上に立地する。本調査の結果，古墳時代の集落の一部であることが分かった。竪穴状遺構や土坑などの遺構が幅 40m の自然堤防上に集中し，多量の土師器と陶邑編年 TK47 並行と推定される須恵器少量が出土した。この須恵器が遺跡の時期の下限を示すと考えられることから，集落は古墳時代中期後半～後期前半の開営まれたと考えられる。

今回の調査では，市内で事例の少ない古墳時代中期～後期の良好な資料が得られたことと，竪穴状遺構で炭化材や地床炉が確認されたことが特筆される。

中田遺跡　第２次調査

－市道荻川新津線道路改良事業に伴う中田遺跡第２次発掘調査報告書－

2009 年　3 月 30 日印刷
2009 年　3 月 31 日発行

編集・発行　新潟市教育委員会
〒 950 － 8550　新潟県新潟市中央区学校町通一番町 602 番地 1
TEL（025）228-1000
新潟市埋蔵文化財センター
〒 950 － 3101　新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地
TEL（025）255-2006

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒 950 － 2022　新潟県新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号
TEL（025）233-0321